
イバラヒメ

あべかわきなこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イバラヒメ

【Zコード】

Z8500T

【作者名】

あべかわきなこ

【あらすじ】

気持ちを新たに高校生活をスタートさせた久城標の前に現れたのは、鬼の腕を持つ少女。口を開けば罵詈雑言しか出てこない彼女に巻き込まれて行き着く先は？ 終わりの見えない鬼退治スクールライフ。

プロローグ

真っ暗な場所。

そこがどこかも、俺には分からなかつた。
意識が、朦朧としているから。

「コレ、やつちやつていいの?..」
女の声がする。

まるで虫を殺すかのような言い振りに、抵抗したくても叶わない。
すると誰かが歩み寄ってきた。
そいつはゅうへじと俺の前にしゃがみ込み、そして言つ。

「 オヤス!!」

次の瞬間、俺は胸のど真ん中を撃ち抜かれた。

「つな、んで.....」

恨み言を叫ぶ前に、身体が倒れる。

それきり俺の意識は、ブツリと切れた。

E2：鬼バス

朝は嫌いだ。

眠いし、でも一度寝したら遅刻しそうになつてバタバタするから嫌いだつた。

眠気を押し殺して学校に来たつていうのに、欠伸してるだけで先生に怒られるし。

そんな日の昼休み。

「久城つて低血圧？ いつもねむそーにしてんな？」
隣の席の脇谷にそんなことを言われた。

「血圧なんて測つたことねーよ」

「じゃあ夜更かしでもしてんのか？ ん？」
つたくやらし一日で見るなつづーの。

まあ、1年ほど前までは夜の街を徘徊してちよつと喧嘩まがいなことしてたりしたけど。

今じや善良な普通の高校生つて奴だよ。
平和で健全な学生生活を謳歌してるんだよ。

……枯れてんなあ、俺。

「お、そうだそうだ。お前今夜、晩飯いけるか？」
思い出したように脇谷が尋ねてくる。

「ん？ 何かあんのか？」

「緑ヶ丘女子との合戦」。スマーミレスで

……なん、だと！？

いや、ちょっと待て。だって俺たちまだピッカピカの高一だぞ？

合コンっていうとあれだ、お付き合いを前提にした出会いが待つ
てるそんなオトナな場所だろ？

……こんなに早くそんな話が来るとは思わなかつた！

「行く」

ひと言で返すと、脇谷は「そつぱん」と思った」と笑つた。

「うちのクラスの女子、全体的にレベルは高いけどガード堅そうな
子ばつかだからなあ」

脇谷のその言葉には同意する。

うちの学校は元男子校なせいもあって、女子の数がとにかく少ない。

どれくらい少ないかといつとうちのクラスの男女比率が3対1な
ほど少ない。

脇谷の言ったとおり、うちのクラスの女子10名は結構可愛かつ
たり綺麗だったりするんだが、男の数が多いせいか萎縮してしまつ
ている感があって、滅多に男子に話しかけてこない。

それこそクラスが男子と女子で2分されているような感じだ。

「じゃあ俺他のメンバーにも確認とつてくるわー」

脇谷は席を立つて隣のクラスへ向かつたようだつた。

……合コンかあ。

緑ヶ丘女子つていうと制服がブレザーに赤いリボンで結構可愛い
ところだよな。

どんな子が来るかなあ。

俺、ちゃんと喋れるかなあ。

結構人見知りだからなあ。

そんなアホなことをぽけつと考えていると、ふとある視線とぶつ

かつた。

「……？」

教室の隅の席。

そこに座っているのはいかにも大人しそうなセミロングの女子。
瑞葉茨乃みずはしおだ。

かなりの無口らしく、女子とも喋っているところをあまり見たことがない。

勿論のこと、俺も言葉を交わしたことはない。

けど顔は、……実はクラスで一番好みだつたりする。

日本人的な素朴な顔立ちで、でも目はぱっちりと大きくて、それでいてちょっとアンニユイな、大人びた感じがイイ。でも孤高なタイプっぽいからきっと男馴れしてなくて、喋りかけてみたら案外真っ赤になつたりして……ふふふ。

けど友達に俺の好みについて語ると『じじくさい』ってよく言われる。

ふい、と、彼女のほうから視線が逸らされた。
どうやらまたま目が合つちまつただけらしい。
でも、ちょっとだけラッキー。

そんな幸運と放課後の合コンへの期待からか、俺は知らず鼻歌を歌っていた。

* * *

放課後、俺は脇谷以下3名と共に道路沿いのファミレスにやって来た。

脇谷の姉ちやんが緑ヶ丘女子高のOGらしく、その伝手で今回の企画が企画されたのだとか。

……それにしても。

「待ち合わせ時間、もう過ぎてるよな?」

俺が思っていたことを隣のクラスの名も知らない奴がこぼした。「部活終わってから直接来るって言つてたからや、もしかしてバスが遅れてるんじゃねえかな?」

脇谷が手持ち無沙汰そうにメニューを見ながら言つ。

「このまま向こうが来なかつたらどうするよー」

その場合このムサシメンバード仲良く夕飯だらうな、なんて心中でぼやいて

「ちょっとバス停見てくるわ」

ソファーの端に座つていた俺は立ち上がつた。

「お、わりいな」

「いつてらー」

そんな台詞を背中で受けて、外に出る。

日はもう完全に落ちていて、空の色が夜のそれに変わりきった頃だった。

この辺りはぶつちやけ田舎で、少し遠くを見渡すと山が見えたりする。

そんな小さな町なわけで、車通りも街灯も少ない。

ファミレスの向かいにあるコンビニの煌々とした明かりを頼りに最寄のバス停へと足を向ける。

いかにも田舎ちっくな格好をした鎧びたバスの時刻表をじっと眺めていると、向こうのほうからバスのヘッドライトが光ってきた。

「あれに乗ってるかなー」

思わず独り言を呟きつつ、首を伸ばしてみる。

バスが田の前で停車した。

前側の扉が開く。

けど、誰も降りてこない。

……乗つてないのか。

俺は運転手に「乗らないよ」的な合図をしようとして、息を呑んだ。

「……！？」

運転席に座っていたのは、おっさんでもお兄さんでも、はたまたおばさんでもお姉さんでもなく、鬼。

身体が真っ黒で、頭に角が2本生えてて、口からは牙っぽいものが見えてるあれを鬼と言わずしてなんと言ひー？

「うわんッ！？」

俺はソレから田をそむけるよひかげにして逃げ出やつとした。のだが。

ガシリ、と。

「なになになに！？」

脚が動かない。

というより首根っこが何かに引っかかって動けない！？

半泣きで後ろを振り返ると

「ギャー————！？」

運転席に座るその鬼が、ありえないくらい腕を伸ばして俺の制服の襟を掴んでいた。

「放せよバカ————！」

ばたばたともがいてもそれは外れず、むしろ

「ぎゃー！？」

グイっとありえない力で後ろに引き寄せられて俺の身体は宙に浮いた。

「だつ」

バスのステップ部分に引っ張り込まれたかと思うと、田の前でバスのドアが閉まる。

「ちょっと————！？」

そのままバスは走り出した。

ら、拉致！？ 拉致られた！？

バスの中を見回すと、緑ヶ丘の制服を着た女子数名と夫婦りしき老人2人が客として乗っていた。

が、皆ぱたりと眠っている。

気絶したのかそれとも眠らされてるのか、とりあえずこの状態は、有り得ない。

けれど振り返るのが怖くて動けなかつた。

「のままこのバスはどうに行くのか。

山の中にある鬼の巣にでも連れて行かれて皆食われちまつのか。

一瞬、鬼に食われる自分を想像してしまって、鳥肌が立つた。

「~~~~~」

俺は意を決して立ち上がる。

「止めろちくしょーーー！」

悠々とバスを運転している鬼に殴りかかった。
が、目視するのが辛かつたので半眼で殴りかかったのがまずかつたのか、俺の拳は狙いを大きく外れた。
そして。

「つ

今度は前から、ガシリと首を掴まれた。

ぎりぎりと閉まつていく氣道。

息が、出来なくなる。

血の氣すら、なくなつてきた。

まずい、このままじゃ、ほんとに、死ぬ。

刹那。

「！」

バスが急停車して、その勢いで首から奴の手が離れた。

「あつ！？ げふっ」

思い切り頭をスロープにぶつけ、ステップに身体が転がる。
ちょうどまい具合にバスの扉が開いて、俺の身体はバスの外まで転げ落ちた。

「…………た、なんだよ…………」

軽く脳震盪気味の頭を押さえつつ、俺は前方を見た。

眩しいくらいのヘッドライトに照らされる人影。

道路の真ん中に、そいつは立っていた。

「…………？」

パークー姿の、細身のシリエット。
あれは、女？

けど次の瞬間、俺は自分の目を疑つた。

「！？」

その女の腕が、ガパリと大きく変化したのだ。
巨大化しただけじゃない。

あれはもう、人間の腕じやなかつた。

異形。

そう、それこそ鬼の腕のような。

その大きな腕はぐんと伸びたかと思うとバスのフロントガラスを
突き破り、運転席にいた鬼の頭を掴んでバスから引きずりだした。
女はそのまま鬼を地面に叩きつけ、鬼はそのまま動かなくなつた。

「…………す、げ…………」

圧倒的な力を前に、俺はただ呆然としていた。

するとすぐに、女の腕は通常のそれに戻つた。
そして彼女が、こちらを向こうとしたそのとき。

「！？」

バスの上からまた別の影が降ってきて、彼女にまとわりついた。

「まだいたのか！？」

俺は慌てて彼女に駆け寄る。

少し小ぶりのその鬼は彼女の腕に噛み付いていて、振り回しても離れないようだった。

「今度こそッ！！

「腕、こっちに出せ！！！」

俺はそう彼女に言い放ち、しつかり両目を開いて、その子鬼の顔を殴った。

「――――ツ」

金切り声を上げて鬼は吹っ飛び、そのまま地面に落下。そいつもそれきり動かなくなつた。

ぽたぽたと、何かが滴るような音が聞こえて気がついた。女の腕から血が流れている。

「あんた、大丈夫か！？」

そのとき、俺は初めてそいつの顔をちゃんと見た。
そして、目を見張つた。

「え……！？」

そこには、見覚えのある顔。

さらりとしたセミロングの髪の、素朴系和風美人。

「みず、は……！？」

クラスメイトの瑞葉茨乃、だつた。

彼女は俺の顔を見て、大げさに、面倒くさそうに溜め息をついた。

「……最悪」

サイアク?

「やな予感はしてたんだけど、いつもアソビシャだとむしろ羨める
つづーか。まあ、仕方ないか」

『萎えるつづ一か』つて。

「お前ほんとに瑞葉か!?」

卷之三

だつて、だつて俺の中の彼女のイメージとしては無口で知的で超純朴なお嬢さんだつたんだぞ！？

なのに、なのに

「耳元で喚くな、ボケ」

なんでこんな口悪いんだよ―――!?

E2・鬼バス（後書き）

約1年ぶりの新作です。

更新速度は遅いと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

バスの運転手がなぜか鬼で。

その鬼を退治したのがなぜかクラスメイトの瑞葉で。
その瑞葉はなぜかこんな感じに口が悪い。

「……俺もしかして夢とか見てるんじゃね？」

「ちょっとばかり頬をつねってみたが、やっぱり痛い。」

「何度も馬鹿やってんじゃねーよ、馬鹿」

瑞葉はそんな暴言を吐きながら、どこからともなく包帯らしきものを取り出して慣れた手つきで腕に巻き始めた。
と、いうか。

「ちよ、あの鬼いなくなつてんぞ！？」

さつきまで地面に突っ伏していたはずの鬼2匹の姿がない。

「消えたんだろ。表に出てきても所詮、心鬼じんきだ」

瑞葉はこちらに田もくれずただそう言つた。

「は？　じんき？」

「説明めんどい。バス」

なんじやそりや！？

「私としてはいいでハイ、サヨナラとこきたいとこなんだが」

「こつちだつてもう帰つて寝てえよ。

そして全てを忘れたい。

「まだ終わりじゃないんだよな、今日は」

……は？

と、俺が首を傾げたと同時に、ネクタイ「」とともにすごい力で引き寄せられた。

「ぐふつ！？」

ありえない、怪力だった。

嘘じやない。

細い腕でネクタイを掴まれただけなのに、俺はそれだけで完全に拘束されてしまっていた。

けど。

なによりも、俺は彼女のその眼に釘付けになっていた。

澄んだ闇。

野生的で、それでいて怠惰で、でもなぜか綺麗な漆黒。

緊張すら氣まずさに変わる至近距離で、彼女は俺に言い放つ。

「ちょっとシラ貸せ、久城」

夜の繁華街を、彼女はつかつかと歩いていく。
ところで、瑞葉はいつもの地味な制服姿じゃない。
デニム地のミニパンツに紺色の薄いパーカーを羽織った、アクティブな私服姿だ。
が。

ミニはミニでも、細過ぎる感じがあつて色気もへつたくれもない。
俺はそんな彼女の背中（といつか尻）をしぶしぶ追いかけていた。

「なあ、どこ行くんだよ」

「アパート

「！？」

え、アパートって、誰の！？

この状況からしてまさか瑞葉の！？

いや、何それどいつ展開！？

俺まだ女子の部屋に足を踏み入れたことすらな

「おじクソ馬鹿。変な妄想しなかつたか」

射るように睨まれて思わず足がすくんだ。

「してません」

「嘘つけ、タコ」

……さつきから聞いてりや人のことボケだのクソだのタコだのと一

一体お前は何様だツ！！

「大体お前は昼間つからアホ面しそぎなんだよ。合コンだかなんだ
か知んねーけどフラフラしてつから巻き込まれるんだ」

……ほんと、何様なんだろつ。

まるで俺のことを見ていたかのような口ぶりだ。

「なあ、お前……」

それを尋ねようとしたら、急に彼女が立ち止まつてタイミングを
逃した。

「着いた」

いつの間にか辿り着いたのは、繁華街から2本ほど奥の道に入っ
たところにあるちょっとボロい感じのアパート。

全部で8部屋くらいしかない、小さな建物だ。

もう夜だといつのにベランダに洗濯物が干しつぱなしの部屋もあ
る。

あ、しかもあれよく見たら「ラジヤ……

「おじエロ坊主、とつとつこいて来い」

「俺エロくないもん……」

そんななけなしの意地すら鼻で笑われて、俺はとぼとぼアパートの敷地に足を踏み入れた。

すると。

「！？」

途端、アパートの各部屋が音を立てて一斉に開いた。

思わず彼女の後ろに隠れる。

「ちょ、なななんだよこれ！ 心霊現象か！？」

「隠れんなヘタレ、よく見る！」

そう言われて、彼女の肩越しにそっと扉のほうを見た。すると、そこにいたのは。

「やっぱ鬼じやねえかよ！？」

まるでゲームに出でるゾンビのよう、各部屋から鬼がわらわらと出てきた。

「あいつらも心鬼だ。田一杯殴れば消える。つーことで後は任せた」

瑞葉はそつ言って、そつと横に退避した。

「ちょ！？」

瑞葉といつ盾がなくなつた途端、鬼の視線は一気に俺に集中しました。

「おおおお前、これ全部俺にやらせる気か！？ ふざけんなッ！」

いつの間にやら隣の家のブロック塀の上に足を組んで座つていかかる瑞葉に叫ぶ。

「るせーな。こつちは制限つきなんだよ」

「はー？」

「こつちが訊き返しても彼女は何も語らない。が

「お前、喧嘩に強いのだけが取り柄なんだろう？」

なぜか彼女はそう言った。

「え……」

なんで俺が喧嘩に強いなんてこと、あいつが知ってるんだ?

「つて思つてる間に来たあッ」

1階の部屋から出てきた鬼が俺の元に飛び掛かってくる。
けど、なんだろう。

さつきのバスに乗つてた奴より動きがどろい。

思い切つて一発殴ると、そいつはすぐに霧散した。

「へ?」

はつきつ言つて、手こじたえない。

「ひゅー、やるー」

全くもつて感情の籠つていない棒読みの歎声が隣から飛んでくる。
けどそんな超適当な野次すら、今の俺を調子に乗らせるには十分
だった。

「はつはつは！ 神木町のオオカミとは俺のことさーー！」

調子に乗つた俺は次々と鬼どもを殴つていた。

数分後。

「はつはつは……。どうだ、俺、強いだろ？……」
久しぶりの乱舞に息が上がつてしまつた。

「つーかなんだよ『神木町のオオカミ』って。ドウテイのくせして
生意氣名乗つてんじゃねえつーの」

「ど……！？」

「さて、トリにいくか

瑞葉はそう言つてアパートの階段を登つていぐ。

「ちょっと待て！ トリつてなんだよー？」「

あとなんで俺が童貞だつて知ってるんだよー？

アパートの2階に上がってから気がついた。

1番奥の部屋だけ、まだ扉が開いていないのだ。

「……なんだよ、あの部屋」

「あそこがバスの運転手の部屋なんだよ。今頃本人とそのガキは布団の中で夢でも見てんだろうが……」

瑞葉はそう言って、ドアノブに手をかけた。

「元凶が残つてりや、また同じことの繰り返しだかんな」

彼女がドアを引いた途端、勢いよく何かが部屋から飛び出した。

「うおあつっ！？」

次の瞬間、感じたのは熱気。

「これが今回の元凶つてわけだ」

宙に浮いているのは、炎に包まれた『何か』。

いや、これもよく見たら鬼だ。

「火鬼、か。未練の念に惹かれたか」

瑞葉はそうこぼしたかと思うと、右腕を宙に伸ばした。

すると、あのときと同じように、彼女の腕は異形のそれへと変化する。

そしてその腕が真っ赤な鬼へと伸ばされたそのとき。

「！！」

鬼はその腕から逃れるように俺のほうへ飛んできた。

「うツ！？」

鬼が俺の首にまとわりつく。

「……ツ！！」

首が、またしても絞まっている。

しかも今回も熱い。火傷しそうだ。

「久城！！」

このとき初めて切羽詰った瑞葉の声を聞いた気がする。

……ひどい奴だと思ったけど、一応は人の血が通ってるんだな……。

「お前今なんか失礼なこと考えなかつたかツ！？」

瑞葉はそう叫びつつ、腕をこちらに伸ばした。

水音が聞こえる。

瑞葉の異形の腕が、水を纏っているのだ。

それはまるで蛇のようにその腕に絡んでいて、そして俺の首にま
とわりついていた赤鬼を取り込んだ。

『——ツ！！！』

鬼の悲鳴だろうか。

なんとも言えない声が聞こえたかと思うと、俺の首から熱がさつ
ぱり消えた。

と同時に狭まっていた気道が元に戻つて肺に一気に空気が入る。

「「ほツ」ほツ」

……今日は2度も死にかけた……。

「還れ、餓鬼が」

瑞葉がそう『ほ』した途端、その手の中で炎を纏つた鬼は蒸発するように消えた。

「…………」

嘘みたいに訪れる静寂。

彼女の腕が、また人間のそれにすつと戻った。

戻つたかと思うと、彼女は扉が開いたままになつてアパートの一室へと踏み込んだ。

「え！？ ちょ、そこの人ん家だろ！？」

慌てて止めようと部屋を覗き込むと。

「……え？」

明かりの灯つていない真っ暗な部屋に、不自然な光があつた。

部屋の奥。

床に敷かれた布団の上に、男と幼い少年が横たわつてすやすやと寝息を立てている。どうやら親子らしい。

そしてその枕元。

そこに座つているのは、白い光を放つ女。

悲しげな、それでいて優しい瞳で、眠る親子を見守つていた。

「もういいだろ。あんたがここにいるとまた別の鬼が呼び寄せられる」

瑞葉はその女にそう言った。

すると彼女は、深く頭を下げた。

『「迷惑を、お掛けしました』

薄い声。

肉声じゃ、ない。

これは……

『退治してくれてありがとう。ちゃんと、行きます』

眠る2人に口付けを落としてから、女は光の粉となつて消えた。

「……わつきのつて、」

「靈に決まつてんだる」

やつぱり！？

「詳しく述べ知らねーけど、夫と子供を残して先に逝つちまつたみたいだな。でもこの2人が心配でここに留まつてた、と」「

「で、なんでそれがあの鬼と関係あるんだよ！？」

「ちつたあ自分で考える。いちいち説明すんのタリいんだよ」

「巻き込んだせに説明くらいしろよ！」

「勝手に巻き込まれたのはお前だらうが」

彼女はさう言つて踵を返し、つかつかとアパートの階段を降りていいく。

「おい瑞葉ー！」

その背中を追いかけて、階段を降りる。

「……どうせ今説明しても、お前は明日忘れるんだ」

彼女はぼつりと、そうこぼした。

「は？」

その言葉の意味が分からなくて、首をかしげると。

「小夜、仕事だ」

その一声と共に、突然俺の目の前に白い何かが現れた。

「あーめんど。雑用で呼び出さないでくれる?」

白い何か。

それは女だつた。

薄く青みがかつた銀の髪に、蛇のよつた金色の眼。
病的なほど白い肌に、白が基調のヘンテコな着物を纏つていて、
どうにも人ならざる者の香りがふんぶんする。

「ていうかまたこのガキ? あんたも相当ついてないわね」

俺に言つているのか瑞葉に言つているのか、ともかくも女は皮肉
げにそう一笑したかと思つと。

「ばあーい

白い人差し指を銃口のように俺に向けて、何かを放つた。

「...」

胸に、身体に、衝撃が走る。

謎の光に撃ちぬかれた瞬間、俺の身体は一切言つことを効かなく
なつた。

「...ん、だ、これ」

そのまま、倒れる身体。

視界が狭まつていく。

意識が飛ぶその寸前に、瑞葉が近づいてくるのが分かつた。

「 オヤスミ」

.....その言葉、前にも、聞いた.....?

E2 - 2・異形ノ腕持ツ茨姫（後書き）

ヒロインがものぐさなためいろんなことを説明していませんが後々ちゃんと説明が入りますので今は意味が分からなくても大丈夫です。すみません不親切で・・・・。

読んでくださっている数少ない読者の方々、ありがとうございます。

E3：放課後『エンジヤー』

朝は嫌いだ。

とりあえず眠い。異様に眠い。

けど学校はもうサボりませんと中学時代の恩師に誓つてしまつた手前、いかに眠くても学校には行かなくちゃいけない。

重たい身体を引きずりながら、教室に入る。

チャイムが鳴るギリギリ前だつたから、他のメンツは皆すでに席に着いていた。

「おー久城。生きてたか」

隣の席の脇谷がそんな挨拶をしてきた。

「朝から失礼な奴だな」

「なんだよ、一応心配してたんだぜ？ 昨日外に出たつきり帰つてこなかつただろ」

「え？ 誰が

「だから、お前が」

……？

首を傾げまくる俺に、脇谷は非常に困つた顔をした。

「合コンだよ合コン。結局緑ヶ丘の子たちもバスが事故つたらしくて来れなくなつちまつたんだけどな？ お前、バス停見てくるつて言つたきり戻つてこないからやバい連中にでも絡まれたのかと思つてよ」

「あー……」

合コン。バス。

そういえば、そうだつたな。
バス停まで行つて、それで……。

「バスが来なかつたから、帰つたんだっけ……」

いまひとつ記憶が曖昧だが、多分そういうことだろ。

「帰るなら一言くらいかけて帰れよなー。あ、先生来た」「担任が教室に入つてきて、それでその話題は途切れた。

1限目はちよいと苦手な数学だつたりする。

俺は一応ノートと教科書を開いて、ただ座つていた。

……しかし変な話だよな。

昨日のことなのに記憶が曖昧とか。

もしかして俺、なんか深刻な病気にかかつてたりしないか？喧嘩でよく頭ぶつけたりしてたもんなあ。うわ、そのせいだつたらどうしよう。自業自得過ぎて泣くに泣けないよなあ。せめて彼女の1人くらい作つてから死にた……

「おい久城ー、聞いてるかー」

コツコツと、テキストで頭を叩かれて我に返る。

気がつけばすぐ横に愛称『バーコード』の数学教師が立つっていた。「ノートも真つ白じやないか、まったく。後で職員室に来るようになバーコードはそう言い残して教壇に戻つていった。

……朝からついてね——！

昼休み。

俺は弁当をかきこんでから、しぶしぶ職員室に向かつことになつた。

「失礼しまーす」

教師陣もちよつど昼飯を終えた頃なのか、見た感じ職員室は空いていた。うちの学校の教師は昨今の値上がりにも負けず喫煙率が高かつた氣がするから、恐らく一服しに外にでも出ているんだろう。
……ていうかバー」「一ドもいねえし。

出直すか、と踵を返そうとしたら

「久城君？」

後ろから、細くて綺麗な声に呼び止められた。

この声は。

「木村先生！ ちわっす！」

ゆるふわ愛され系の栗色ロング。

天使のような笑顔に、それを際立たせる純白の白衣。

そしてその下に隠された超スペクタクルナイスバディ！
我が校が誇る奇跡の養護教諭、木村手鞠先生が立っていた。

「こんにちは。職員室に何か用があつたんじゃないの？」

「いやー、バ……じゃなかつた三田先生に呼び出しきらつてたんす
けどいないみたいなんで」

木村先生は「そうねえ」と職員室を見渡した後

「居眠りでもしてたの？ 他のクラスの子も三田先生にそれで呼び
出されてたから」

『気さくに話しかけてくれた。

「今日は考え方つすよ」

「何か悩み事？ だつたら抱え込まないでいつでも保健室に来てね
おお、エンジェル……！」

けど今年度木村先生が赴任してきてからとこつもの、うちの保健室はいつも満員だったりする。

というわけで健康優良児である俺がこいつって先生と話が出来る
機会なんて、そつそつないのだ。

「でも感激つす。木村先生に名前覚えてもらえてたなんて」

思わず本音を漏らすと、先生はくすりと笑つた。

「4月の健康診断のときにつづいて一応は顔を合わせてるでしょ? 久城君つて、標つてこいつ下の名前しるべが格好良くて印象深かつたのよね」

「おおう……！」

今まで『しるべえ』とかテキトーなあだ名の元になつてた俺の名前だけ、たまには良いこともあるんだな！

「放課後またいりつしゃい。あつと三田先生もこりつしゃるわ」「うひつす！」

俺は上機嫌で職員室を出た。

鼻歌を歌いながら少しスキップ気味に階段を下りていくと、上ってきた側の生徒とぶつかりそうになつた。

「おつと、悪い……」

謝った先にいたのは、うちの学校では希少な女子。
しかも、瑞葉だった。

「…………」

驚いているよつて、大きな眼を見開いている。

しかし無言。

もうちょっと喋つてくれないかな。

「ごめんなー」

あはは、と愛想よく笑つてみたが、やっぱり瑞葉は喋らなかつた。
といつより、視線が何気に痛い？

瑞葉はそのまま俺を避けて階段を上つていった。

「…………」

そのとせ、白いものが見えた。

いや、スカートの話ではなく、服の袖から、だ。

包帯のように見えたけど、腕、怪我でもしてるんだひつか？

そして、放課後。

もう一度職員室に向かうと今度はちゃんとバーコードが席にいて、俺は少しばかりの説教をくらつことになつた。

「いいか久城、これはお前のためを思つて言つてやつてるんだぞ？
高校に入つて間もないこの時期が一番大事なんだ。ここで勉強に乗り遅れるとだな……」

うー、まあ確かにバーコードが言つてゐることは正しこと思つんだけどな？

でもやっぱり昨日の記憶が曖昧なのがひょつと気になるんだよなー。

どうせ今日暇だし、帰りに保健室寄つてみようかな。
うん、そうしよう。

「おいら久城！ 聞いてるのか！？」

「ういっす！」

返事だけちゃんと返して、なんとかその場を乗り切つた。

教室に鞄を取りに戻つて、そのまま保健室へと向かう。

放課後ともなれば流石に常連の奴らももうこないだりつ、と踏んでいたのだが。

……甘かつた。

既に部活が始まっている時間ゆえに、

「木村せんせー、ボールが顔に当たつて鼻血がー」

とか

「捻挫しちまつたみたいなんすけど診てください手鞠せんせー」

などなど、お前らほんとに高校生かよと言いたくなる男子共が保

健室に群がっている。

にも関わらず木村先生は

「はいはい、順番に診るからちゃんと並んでー」

笑顔を絶やさず天使のように対応している。しかも

「あら久城君。三田先生には会えた？」

入り口付近にぼけっと突っ立っている俺に気付いて声まで掛けてくれた。

「はい！ こつてり絞られました！」

「ふふ、その割には元気ね」

微笑む天使。ああ、癒し系。

「あのー、先生にちょっと相談があつたんすけど、今忙しいつすよね」

保健室にはまだごろごろと団体のでかい奴らが並んでいる。これを全部診ていたら先生もなかなか帰れないだろう。

「相談」と? ならゆつくり聞かないよね

先生はそう言ってから

「6時にここにいらっしゃい。それまでに随診ておくから」

そつと、俺に耳打ちした。

……こ、これは!

これはまさかのアッハん課外授業!?

……じゃなくって、わざわざ俺のために時間を割いてくれるといふことだ。

ああ、やっぱり木村先生って良い人だよな……。

「じゃ、また！」

俺も他の奴らに聞こえなこよう小声で返すと、先生は笑顔で応えてくれた。

とりあえず6時になるまでどこかで時間を潰さないといけない。こうこうとき部活に入つてれば便利だつたんだが、生憎不器用で球技は苦手だし校舎内で大人しく活動する文化部も性に合いそうになかったから俺は帰宅部だ。

一旦校舎の外に出るのも面倒だし、教室でちょっとばかり居眠ろう。

そういう結論に達して教室に戻ると。

「…………？」

俺の机の上に、何かが落ちていた。

よくよく見ると、それはノートの切れ端で。

『早く下校しろ』

ただけ、書かれてあつた。

「…………？」

このメモは俺宛てなんだろうか？

正直、見たことのない字だった。

形の整つた綺麗な文字。

男の書く字でもなさそんなど、ほとんど接点のないうちのクラスの女子がこんな伝言を書くとも思えない。すると教師の誰かだらうか？

「……ふむ

結局、このメモは誰かが誰か宛てに書いたものがたまたま俺の机の上に落ちたんだろうと思つことにして、俺は机に突っ伏した。

目を覚ますと、辺りは薄暗くなつていた。

「…………」

寝ぼけ眼で黒板の上有る時計に目をやると、時刻は6時半を回つていた。

「…………やつべ！」

約束の6時を30分もオーバーしちまつてゐじゃねえか俺の寝ぼすけ！！

俺は慌てて教室を飛び出して、保健室へと急ぐ。

校舎内に人気はない。

部活は6時までという規則だから、当然といえば当然だ。この分だとさつと木村先生も帰つてしまつてゐるだらう。

保健室の前に辿り着く。

案の定、部屋に明かりは灯つていない。

「…………はあ」

扉の前で、盛大に溜め息を吐く。

せつかく6時まで学校に残つてたのにこの様だ。
それに先生も待つてくれたかも知れないのに……。

とそのとき、突然目の前の扉が開いた。

「ひゃ！？」

本当に突然だったので思わず後ろに飛び退くと、そこにはいたのは白衣を脱いだ私服姿の木村先生だつた。

「あ、先生」

「待つてたわよ。さ、入つて」

木村先生はいつもの笑顔で俺を招きいれてくれた。

「お茶でも飲む？」

「えつ、いいんすか？」

「安物のティー バツグしかないけど」

そう苦笑しながら木村先生はお茶を準備してくれた。

悪いなーと思いつつ、俺はベッドの端に腰掛けて待つ。
しばらくすると、ふわりと紅茶の良い香りが保健室中に広がった。
先生が使っている銘柄は家にあるものと同じ一般的なものだった
が、俺の家じゃこんなに良い香りは立たない。

やっぱインスタント紅茶も人を選ぶんだな、うん。

「はいどうぞ」

「どうせー。」

差し出されたマグカップを受け取って、そのまま一口ジョギーと飲み干す。

さつきまで寝てたから喉渴いてたんだよな。

「それで、相談つて？」

丸椅子に座つた先生が尋ねてきた。

「いやーそれがつすね、俺昨日の記憶がなんか曖昧で」

「記憶が？ どんな風に？」

「どんな風について言われると難しいんすけど、なーんかいまいち記憶してることに実感が湧かないっていうか……」

そう、ふわふわした感じだ。

昨日の夜、俺は一体何をしていたんだらう。

ファミレスを出たところまではちゃんとはつきり覚えてる。
その後俺はバスを待つていて、それで、でもバスが来なくて……。
「の辺りから、どうも記憶がふわふわ……」

「…………？」

ふわふわしている。

足元が。

「え……」

めまいを感じているかのような感覚。
頭が、ふらついている。

「あ」

気がつけば、手に持っていたマグカップをガシャンと床に落としていた。

けど、「すみません」と謝ることすら出来ないほど、頭がぐるぐるしている。

俺の身体はそのままぱたっとベッドに倒れてしまった。

「？　？」

身体が思い通りに動かない。

何が起こっているのかさっぱり分からぬと、ベッドがぎしそと音を立てて軋んだ。

「…………え」

目の前に、木村先生がいる。
彼女が浮かべるのは、笑み。
いつもの天使のようなそれではなく、まるで小悪魔か魔女か、そんな妖艶な笑みだった。

「ふふ、案外簡単に引っかかったわね」

彼女はすっと、その細い指で俺の額を撫でた。

「！？　！？」

「なななんだこのアブナイ状況は！？」

「……私、ずっと君のこと狙ってたの」

先生は甘い声でそう囁きつつ、その指を額から頬へ、頬から首へと下ろしていく。

「ね、狙つてつてな、なんすかそれ！？」

「知りたいの？」

先生は俺の反応を面白がるように指をさりげなく移動させた。

「あ、鎖骨はやめて！」

鎖骨弱いんだよ俺！！

田を瞑ったのが悪かったのか、俺の弱点を察して彼女はそこをついととなぞった。

「ひいあうー？」

「あら、良い声で啼くのね」

「う、うおおおおん！？」

どうしよう、このままじゃ俺の貞操が！

俺の純潔が！！

奪われ

「るつてあアー！？」

気がつけば、俺にのしかかっているのは木村先生じゃなくなっていた。

鬼だ。

キロリと光る紅く邪悪な眼。

禍々しさすら感じさせる鋭い牙。

額に生えた見事な一本角。

「イヤー——！？」

じたばたと逃げ出したいが身体は全くと言つていいほど動かない。

「君ノ力、微弱ダケドトテモ美味シソウナノ。私ニ、頂戴？」

鬼が二タリと涎を垂らした。

知るかよ嫌だよ食われたくないよ！？

神様仏様ご先祖様、もう誰でもいいから助けて————！

刹那。

バタンと、激しい音が保健室に響いた。

「！？」

俺の上に乗つていた鬼が入り口のほうを凝視する。
そこには。

「校内でナメた真似してんじゃ ねえよド馬鹿共が
ドアを蹴破り暴言を吐く、瑞葉がいた。

E3：放課後エンジヤー（後書き）

これ以上ないほどノリで書いている本作ですがしおぱなかりお気に入り登録等々ありがとうございます。励みになります。

E3 - 2・放課後テノンジャーー？

「？ ？」

いよいよ意味不明な事態になってきた。

放課後保健室で木村先生が襲つてきたと思つたら、突然先生は鬼になるし。

そしたらいきなり瑞葉が『ド馬鹿共が』とか言いながら乱入してくれるし。

……て。

「ド馬鹿共」とことは俺も入つてるのかー？

「当然だド間抜け」

……ド間抜け……。

俺がショックを隠せないでいると、ふと鬼がベッドから降りた。鬼は瑞葉と対峙するように間合いを取る。

「才前ハ……何者ダ？」

「寄生虫に名乗る筋合はない」

挑発とも取れる瑞葉の発言に、それでも鬼は笑みを浮かべた。

「才前ガ言エタコトカ？」

……？

「お喋りな虫だな。とつとと失せり」

瑞葉はそう言い放つて右腕を前にかざした。

するとその腕は急速に形を変え、人間のものとは到底思えない異形の腕へと化す。

それに驚いている暇もなく、

「ハハハツ」

今度は鬼が高笑いを上げてその腕を瑞葉のほうへと伸ばした。

「！」

鬼の腕は植物の蔓のようなものと化して瑞葉の腕に巻きついた。瑞葉はそれを引きちぎろうと腕を引いたが、しなやかで丈夫そんなその蔓はびくともしない。

それどころかミシミシと音を立てて彼女の腕を締めつけ始めた。

「……ツ！」

彼女の顔が段々と険しくなっていく。

「瑞葉！？」

駄目だ。声は出せても身体が全く動かない。

さつきの紅茶に何か仕掛けがしてあつたんだね？

なんでグイツといつちやつたかなあ俺！？

が。

「……こ、のクソがツ！！」

綺麗な顔に不釣合いな罵詈を彼女が吐いたかと思つと、その異形の腕が僅かに肥大化する。

と同時に絡んでいた蔓が音を立てて千切れ、弾けた。

「何！？」

鬼は驚いて一步後退する。

千切られた自らの腕を見下ろし、

「……何故ダ。土ノ匂イガスルノー」

そう呟いた。

「身の程を知れよ、木偶が」

瑞葉はトドメといわんばかりに鬼の懐へと飛び込む。

その大きな掌で鬼の顔を掴もつとしたその瞬間

「！！」

ふと鬼の姿が元の木村先生のそれに戻った。

糸の切れた人形のようにその場に崩れる先生の身体。

瑞葉はそのまま彼女の下敷きになつた。

そして。

「待てこのッ！」

彼女の身体から抜け出たらしい鬼は瑞葉を嘲笑うように天井に張り付いてから、保健室の窓ガラスを派手に割つて外へと飛び出していった。

静まり返る保健室。

「 ッ、逃がした」

瑞葉のいかにも不機嫌な舌打ちと声がぽつりと響く。

「あ」

気がつけば、俺の身体に自由が戻つていた。
ぱつとベッドから起き上がり、瑞葉と木村先生の下へ駆け寄る。
すると瑞葉が面倒くさそうに木村先生を押しのけて起き上がるところだった。

「な、なあ、木村先生はなんだつたんだ？　さつきの鬼にとり憑かれてたのか？」

ごろんと床に倒れている木村先生は、穏やかな顔で眠つている。
見る限りではいつもの先生だ。

「大方仕事中にヘマでもしたんだろ。最近の輩は精靈も持たずに单体で動くからこういうことになる」

瑞葉はまるで木村先生を叱咤するようにそう吐き捨てた。

「仕事中にヘマ？ 精靈？」

さつきから分からぬことばつかなんだから分かるように説明してくんないかな。

「知りたいんならこの女に直接聞けこのアホ」

瑞葉はそう言つてどかりと手近にあった先生専用の椅子にふんぞり返つた。

「アホってなんだよアホって！－！」

「わざわざ忠告してやつたのにひとつ帰らないバカをアホと呼んで何が悪い」

……忠告？

「あ

放課後、俺の机の上に置いてあつたメモ。

「『早く下校しろ』って、あれお前のメモだつたのか！？」

彼女は無言でぐるりと椅子を一回転させた。

無言ということは肯定なのだろう。

「なんあんなメモ……。お前、先生が鬼に憑かれてるつて前から知つてたのか？」

「憑かれること自体珍しいことでもなんでもない。特にこの女に憑いてた木鬼は人に寄生するのを好むからな」

「ええ！？」

それつてヤバくないか！？

「まあ、木鬼には害意のない奴らが多いし、しばらくして飽きたらすぐに出でていくような奴らだから特に気にしてなかつたんだが」「だが？」

促すと、瑞葉は俺を鋭い視線で射た。

「お前があの鬼に興味を持たれちまつたせいでこんな面倒なことになつたんだ」

……なんだそれ。

「つていうかなんだよ！俺が悪いみたいな言い方すんなよー。」

「別にお前の存在を否定してるわけじゃねえよこのタコ。だからわざわざ早く帰れって忠告してやつたんじゃねえか」

……う。

「で、でもなあ！？ 名前も理由も書かれてないのにいきなり『早く下校しろ』なんて言われても」

「口うたえすんな」

ギロリと、すごい勢いで睨まれた。

……なんか今の瑞葉、言葉からして乱暴だけど、それにしてもちよつと機嫌悪すぎるんじゃないかな？

鬼に逃げられたのがそんなに悔しかったんだろうか。

そんな時。

「…………ん？」

床に倒れていた木村先生の目が、うっすらと開いた。

「…………あら？」

緩慢な動きで、先生は上体を起こす。

「先生、大丈夫ですか？」

思わず声を掛けると、彼女はゆっくりと俺を見、瑞葉を見、倒れたドアと割れた窓ガラスという悲惨な保健室の状態を見回した。

「…………あー。やっちゃんたか」

そしてがつくしどうなだれる先生。ていうか先生、胸の谷間が見えてま

「ぶツ」

横から即頭部を蹴飛ばされ俺の身体はずしゃりと床に突つ伏した。蹴つたのは他でもない瑞葉だ。

「この色ボケが」

……なんか、瑞葉、まじで、怖い。

「おいたこの巨乳。一応何があつたか説明しろ」

養護教諭とはいえ仮にも先生を『巨乳』呼ばわりする瑞葉に、それでも彼女は笑つて答えた。

「あははー。瑞葉さんなら大体察しがついてると思つけどバイト中にちよつとトチっちゃつたみたいで、鬼に身体を乗つ取られたのよねー」

やけにぞつくばらんな感じだが、先生と瑞葉は親しいんだろうか？「これに懲りたらせめて妖の1体くらい引き込んでおけ。自分の始末は自分でつける」

瑞葉は偉そうにそつまつと、椅子から立ち上がった。
「はいはい分かりましたー。てことはあの木鬼は瑞葉さんがやつつけてくれた感じ？」

彼女の問いに、瑞葉はピタリと動きを止める。

「……あら？ もしかして逃がしちゃつたか？」

すると瑞葉は先生に向かつて怒り始めた。

「お前の身体が邪魔だつたんだよ！ 特にその無駄にでかい胸……」「あははー、瑞葉さんだってあと数年すればもうちよつと大きくなるわよー」

「余計なお世話だーー！」

……うーん。

確かに瑞葉はまだ発展途上な気がす

「ぐへふツー？」

なぜか再び蹴飛ばされる俺。

「とにかく。あの鬼が調子に乗る前に片付ける必要がある。そもそもお前のヘマが原因なんだから協力してもいいわ」

瑞葉は木村先生にそう言い放つた。

「瑞葉家のお姫様にそう言われたら仕方ないわね」「やれやれといった感じに先生も立ち上がる。

そんな2人をぽけっと床に倒れたまま眺めていると

「おい久城。お前もだ」

ガシリと瑞葉に首根っこを掴まれた。

「……は？」

そのまま無理やり立たされる。

「あの鬼は恐らくお前を狙つてくる。無闇に探すよりお前をエサにしたほうが早い」

ふーん……

つて……

「ふざけんな！ エサつてなんだよエサつて！」

「エサはエサだ。つまり囮」

「それくらい分かってるよ！ なんで俺がそんなことしなきゃいけないんだよ！」

「お前にも落ち度はあるからな」

「知るかッ！」

「久城のくせに生意気だ」

「どっちが生意気だよ！？」

ガミガミ喰いていると。

「あーあーもう、駄目よ瑞葉さん。お願い」とをするときは、ちやんとそういう態度を取らないと

さつきまで鬼に身体を乗つ取られていたといつて、木村先生はやけに落ち着いた様子ですっと俺の前に出た。
そして。

「ねえ標君……今回だけ私に免じて協力してくれないかしら」

「どこのか潤んだ瞳で俺の顔を覗き込み

「お・ね・が・い」

耳元で、甘くそう囁いた。

「……！」

耳朵にかかる優しい吐息に思わず背筋が震える。

「……う、うこっす……」

流れで返事をしてしまった

「フフ、良い子ね」

先生は俺の頭をも軽く撫でた。

「く、くすぐつたいですって！」

「あらやだ照れてる？　かーわいー」

ああ俺もてあわばれてる！？

……つて！

「……」

ギロリと。

瑞葉の、生ごみを見るかのよつな視線が痛い。刺さるほど痛い。

けれど先生はそんな彼女にたじろぐことなく

「さて。流石に今日は向こうも警戒して仕掛けではないでしょ？」
「のまま解散でいいかしら？」

そう提言する。

「いや、それは……」

瑞葉が慌てたように何か言いかけたが

「ん？　何か問題があるの？　出来ればこの保健室、今夜のうちに
修復しておきたいんだけど」

木村先生の言葉に瑞葉は渋い顔をしつつ

「……別に」

そう吐き捨てる、保健室を出て行く。

「あ、おい瑞葉！」

俺が呼び止めても彼女は立ち止まることなく、すっと廊下の闇に消えていった。

「行つちました……」

結局、この事態がなんだつたのか彼女の口から一つも説明を受けていない。

「ふふ、巻き込まれちゃったわねー」

傍らの先生がどこか面白そうにそこそこにぼしながら、流しに置いてあつた「ム手袋をはく。どうやらガラスの破片を片付けるらしい。

「先生、瑞葉のことなんか知ってるんすか？」

「ん？ そうねえ、知り合いつてわけじゃないんだけど瑞葉家つていうとこの辺り一帯のアレだからねえ」

「アレ?」

「そう、アレ。私みたいなフリーランスでも一応氣を遣うのよねー」

手際よくちりとりで破片を片付けていく先生。

俺も慌てて掃除道具入れからモップを取り出し、自分がこぼしてしまった紅茶を拭ぐ。

「フリー……って、なんすか？」

俺がそう尋ねると、先生は心底驚いたように目を丸くした。

「あれ。久城君知らないの？ まつたく？」

いや、何を知らないのか俺はむしろ分からんだけだね？

俺のぼけつとした様子から何か悟つたのか、先生は少し難しげな顔をした。

「……なるほど。君は覚醒型なわけね」

「はい？」

「まあその辺りはどうでもいいか

「いやよくないつすよ、なんすか先生まで瑞葉みたいに」「

すると彼女はくすりと笑つた。

「教えてくだせりよ、気になるじやないつすか。さつきの鬼といい瑞葉の腕のこととこと」

俺が懇願すると、そりねえと先生は少し逡巡してから俺に告げた。

「私はフリーの何でも屋、瑞葉さんは桃太郎つてとこね」

「はい?」

「そのままの意味よ。最近公務員のお給料も減りに減つてゐるからねえ、内緒でバイトしてゐるの」

「バイト?」

「軽い除霊とか、たまに恋占いもやるわねー。あとはその手の仲間に情報を売つたりとか」

そ、そつち系のバイトですか。

「で、瑞葉さんは生糞の桃太郎。鬼を退治するのがお勤めつてことねえ。……まあ彼女の場合あれだけど……」「

「さつきからアレアレってなんなんすかもつー」

「そんなに気になるの? もしかして久城君、瑞葉さんみたいな子が好みとか?」

「そ、そんなんじゃなくー!」

俺が赤面して吼えると、先生はさらに可笑しげに笑うだけだった。

……恐るべし木村先生。普段から男に囲まれてるだけあってあしらい方に隙がない。

「今日はもう遅いから帰りなさい。氣をつけ帰るのよ」

有無を言わせぬ強引な笑顔で見送られ、俺はしぶしぶ学校を後ろにした。

E3 - 2・放課後ティンジャーアー？（後書き）

更新遅くてすみません。ほんとうに進めていきたいと思っています。読んでくださっている方々、ありがとうございます。

端的に言えば、神木町は田舎だ。

町という位置づけだが、面積、人口といつては隣の市とほとんど差異はない。

そもそも、何をもって都会と田舎を区別するのかは案外難しいところだが、こと神木町においては空気が田舎だつたりする。

山に近く、海に近く、しかし決して大都市から離れているわけではなく、むしろ電車を使えばものの1時間で政令都市に遊びに行けたりもある。

つまりところ、この町 자체にはこれといった特徴がないというのがその空気の原因だつたりする。

まあ、それはあくまでも『表』の話だが。

そんな、どこか寂れた空気が漂う神木の夜道を、ひとりの少女が歩いていく。

紺色のセーラー服、漆黒の髪は夜の闇に溶けきつており、僅かに袖から覗く手と顔の白さが浮き彫りになっていた。

その白さに惹かれるように、もしくはその強い闇に惹かれるように、彼女の前方にふらりと2つ、人影が浮かび上がる。

身の丈は決して大きくない。
子供のようにも見えるその人影。

否、それは人ではなく鬼だった。

「また心鬼か。どこから湧いてやがる」

少女はまるで虫でも見るかのような目でその異形を見、盛大に顔をしかめた。

鬼は構わず、彼女のほうへとゆるゆると寄つてくる。

その動きは非常に緩慢で、まるで出来の悪いロボットだった。

少女 瑞葉茨乃は一片の躊躇いもなくその鬼の顔面を蹴飛ばす。間髪いれずその隣の鬼にも一発食らわせ、両者を昏倒させた。

が。

「!?

すぐにまた、ゆるゆるとその2匹の鬼は立ち上がり始めた。これに一瞬ひるんだ彼女に、それでも鬼は構わず寄り付いてくる。その様子はまるで、畜生的に母を求める幼児のようでもあった。

「……ッ、触るな!」

反射的に、彼女は自らの右腕を使っていた。

それは振るわれたと同時に異形の凶器と化し、まとわりついた鬼2匹の身体をへし折るように難いでいた。

鬼は完全に消滅。

彼女はそれを見届けて、憎憎しげに腕を下ろした。

「.....」

鋭い視線で、空を仰ぐ。

星は、ぼやけて見えなかつた。

* * *

朝は、嫌いなはずだった。

けど今朝はなんだかいつもより目覚めがいい。

ここまで気持ちいいとむしろ一度寝したくなってしまつ……が、
そんなことしたら遅刻するのでやめておいた。

いつもより早めに登校すると、隣の席の脇谷が心底驚いたような
顔をした。

「お前がこんな時間に来るなんてめっずらじー」ともあるもんだな
？ 槍でも降るんじゃね？」

「相変わらず失礼な奴だな。俺だってたまにはお田田パツチリな日
があるんだよ」

「ほーう？」

そんな他愛のない話をしていたら、ふと教室に入ってきた女子生
徒と田が合つた。

瑞葉だ。

俺はいそいそと彼女のほうまで駆けていく。

「おい瑞葉！ お前何の説明もなしにさつさと帰んなよなー…？」

開口一番俺がそう言うと、彼女は鬱陶しそうに俺を睨んだ。
と同時に周りの奴らも驚いたような、それでいて好奇の目でこつ
ちを見てくる。

「……う」

視線が痛い。

そしてトドメは彼女のそっぽ。

あからさまにシカトされブレイクハートした俺はそのまま廊下に
飛び出した。

「なんなんだよあいつ！」

ふりふりと腹を立て目的もなくずかずかと廊下を歩いていると、なぜか保健室前に辿り着いてしまった。

まあ、保健室は1階の一番奥にあるから真っ直ぐ歩けばここに辿り着くことになる。

「…………」

そういうや保健室はちゃんと元通りになつたんだろうか、なんてこ

とが少し気になつて俺はそつと扉に手をかけた。

人の気配がしなかつたので鍵がかかっていそうだったのだが、予想に反して扉は易々と開いた。

朝の保健室。

いつもとなんら変わりない光景。

昨日割れてしまつた窓ガラスも、どういう手を使ったのかすっかり元通り　というか新しいものに換えられている。

昨日の一件など、これでは誰も窺い知ることは出来ないだろ。

「…………」

ふと視線を奥のベッドに移すと、見えたのは脚。

肌の色を受け少し茶色がかつて見える黒のストッキングが、その美脚をより艶めかしく魅せる。

その脚だけでベッドに寝転んでいるのが誰だか分かつてしまつた。

「……木村先生、朝からこんなところで寝ていいんすか」

朝日を受け、白く輝くベッドの上に横たわるのは天使、もしくは女神のような木村先生。

俺が近づいて声をかけても、彼女はまだ夢の中らしく、むにゅむにゅ何か呟いている。

「ユーッヒューセーンせー。ぐふふ」

……「うわよ、せんせい？　ぐふふ？」

今の木村先生は普段では決して見せないような緩みきつた顔をしている。

それこそ恋人にしか見せない一面、みたいな。

「うわちむこてよーう」

先生の寝言はまだ続いている。

夢の中で校長を振り向かせようとしているのだろうか。

というか、うちの校長は来年定年、それにしても老け顔のしわしわなおじいちゃんなんだつたりする。

まさか木村先生って、そういう趣味なの、か……？

「ああん待つて！」

その声と共に、先生は飛び起きた。

「…………」

「…………」

田嶋めの意識ははつきつとしているのか、先生は俺を見て固まっている。

そして数秒経った頃

「あら、おはよう久城君」

いつもの営業スマイルに戻った。

「先生つて、熟年趣味だったんすか」

「！？」

「ぐふふつて」

「ぐふふ！？」

「言つてましたよ」

「そ、そんなこと？」

「こーうちょーせーんせーつて」

「あああ言つちゃ駄目！！ それは私のトップシークレット！！」
手で顔を覆つてガツクリとうなだれる木村先生。

……ふ、これで昨日の借りは返したな。

「久城君たら意外とイケズね」

そう言つて拗ねる先生はお世辞抜きで可愛かつた。
これで熟年趣味というのだから勿体無い。

「そんなこと言つたら先生だつて意地悪つすよ。昨日のこと何にも
教えてくれなかつたし」

すると先生はやれやれと軽くその髪をかき上げた。
「仕方ないなー。じゃあここで軽くレッソングスン？」

「え、いいんすか？ やつた」

「オーケイオーケイ。プリーズシッダーン」

そんな適当なノリで先生の講義は始まった。

「で、何を知りたいの？」

木村先生は先生専用の背もたれ付きの椅子に腰掛け直し、向かいの丸椅子に座る俺を見据えた。

「全部

「あら、欲張りさんね」

先生はそう笑いつつもどこか投げやりな表情を一瞬垣間見せた。
実は先生も瑞葉と同じで相当な面倒くさがりだったりするんだろ
うか。

が

「じゃあ最初からねー。まず鬼の存在からかしら？」

本当に知りたいところから喋ってくれるあたり、やはりお人よし

……というか面倒見がいいのだろう。

「ひとくくりに鬼つて言つても、現代じゃ色んな種類があるの」

「はあ」

「私に憑いていた木鬼は古から存在する妖に近いものね。まあ、五行の名を冠する鬼はそれぞれ起源こそ違えどカテゴリ的には同じに割り振つてもいいと思うわ」

「はい先生」

すちやりと拳手する。

「なあに、久城君」

「既にわけわかんねえっす。『ゴギョウ』ってなんすか？」

「ググれ」

先生は笑顔でぱつさりそう切り捨てた。

「ひどッ！？」

「あーもーほんと久城君て初心者ね。何の心得もないの？ 鬼が見えるのに？」

先生は大きく溜め息をついた。

……ああ、そうか。

鬼つてやつぱり、普通の奴には見えないんだ。

「私としてはむしろどうして君がそんなに無知なのか知りたいくらいよ」

先生はぼそりと、独り言のよつに呴いた。

……そんなこと言われてもなあ。
知らないものは知らないんだじ。

「俺、見えるよくなつたのはほんとつい最近なんすよ
正直に言つ。隠しても仕方のないことだ。

「つい最近つて、どれくらい?」

「ほんの1年とちょっと前くらいです」

俺がそう答えると先生は目を丸くした。

「……それは、確かに最近ね……」

彼女は顎に手を当ててなにやら難しい顔で考え込んでいたが

「そういうことなら仕方ないわね」

どこか諦めを含んだ声でそういはしたかと思つと。

「君は今、腹痛を訴えている」

「へ?」

「あまりにもお腹が痛かったのでベッドに横になりながら木村先生の子守唄を聞いていました、と担任の先生には言つておくのよ?」

「はあ」

そういうわけで俺はこの1時間、先生からある種の裏知識を教授してしまつことになつた。

E3・3・レッスン手鞠先生（後書き）

ほちほちとか言って連日更新とかなんかもつ々分で更新しています
みません。不定期ですがどうぞよろしくお願いします。

E3・4・レッスン手鞠先生？

1限目の開始を知らせるチャイムが鳴る。
グラウンドではどこのクラスの奴らがぱらぱらと準備運動を始めた。

そんな様子を傍目に、木村先生は伝言用の小さなホワイトボードを抱えて俺に向き直った。

「なんだかんだ言つても、世間には2種類の人間がいるの」「はあ」

「見える人と見えない人よ」

「先生、そのフレーズどつかのゲームで聞いた気がします」
確かに大きなモンスターを狩るゲームで猫が喋つてました。
瑞葉さんと私、そして君は要するに見える人なのよ」

先生は俺のツッコミを無視して喋り続ける。
「でも私たちと君の間には大きな壁　　違いがあるようね」

「違い、ですか」

「君の両親は見えないんじゃない？」

「……そう、つすねえ。見えるなんて聞いたことないしそんな素振り全然ないっす」

すると木村先生は「やつぱり」と頷いた。
「君が覚醒型って言つたのはそういう意味よ」

「……つまり、遺伝とかそんなんじゃなくて、ぱっと急に見えるようになる奴のことっすか？」

「んー、まあそうねえ。でも覚醒型の子達だって生まれつき見える子や本当に幼い時分に何らかのきっかけで見えるようになる子がほとんどよ。君みたいに10代を越えてからつて例は稀だと思うわ。少なくとも私の周りでは初めて聞いたわね」

……そういえば、そんなことを前にも言われたかもしれない。

「まあとにかく、見えるようになつちゃつたものは仕方ないしね？
今更元に戻るっていうのは無理な話よ」

「はあ」

俺が気の抜けた返事を返すと木村先生はビックリ眉をひそめた。
「……というか久城君の場合、その点はもう克服してる感じね？
物心ついてから見えるようになるってのは結構辛いんじゃないかと思つたけど」

「はは、まあその辺はもう諦めました」

思わず頭をかく。俺の能天氣さに呆れたか、先生も詮索を諦めた
ように息を吐いた。

「まあその辺りはおいおい聞くとするわ。とにかく君は無知だから
ね」

そこまで言つてまた先生はふと考え込む。

「……いえ、もしかするとこれは意図的なのかしら」

明後日の方向を見て難しい顔をしている先生。

「せんせー、早く次教えてください」

俺がせがむとはいはいと彼女は再び向き直った。

「でね、私の場合は父が覚醒型だったみたいで、その血を受け継い
だみたいなの。だからもともとそういう家系つてわけじゃないのね
ふむふむと頷く俺。

「歴史のない家はコネも経験もないからそういう面では仕事にしにくいのよ。だから父は極力普通に生活してたみたいだけど、私は昨日言つたみたいにバイト程度にちょっとだけ働いてる」

「はい先生。昨日たまたま見た映画で公務員はバイト禁止つて言つてました」

「そんな法律もあつたかしらねー」

先生は笑つて流した。

「要は職務専念義務の問題でしょ？　通常業務に支障が出てない限
りは問題ないわよ」

先生は得意げにそう言つた。

「……支障、出でませんでした？」昨日

「うう」

先生はそのバイト中に鬼に憑かれて昨日の事件を起したことになるわけで。

「…………意外と痛いところを突くわね久城君」

先生はまるで幽霊のように髪をだらりと垂らして落ち込んでいる。

「え、いや別に突きたくて突いたわけじゃないんすけどねー？」

「…………そこのの？」

先生は潤んだ瞳で俺を見つめてくる。

う。

その眼が昨日の『お・ね・が・い』を想起させて思わず腰を引いてしまつた。

が、それを好機ととつたのか、先生は一瞬蠱惑的な笑みを浮かべる。

「ねえ、標君？」

先生はすっと椅子から身を乗り出してくれる。

「昨日の件は本当に悪かったと思つてるわ……。保健室の窓だつてポケットマネーで修繕したし、寒害が及んだのは君だけ……」

伏田がちに、それでも先生は迷わず俺の首筋にその細い指を添えてきた。

「君が許してくれたらいいんだけど……ビーッたら許してくれるかしら」

先生の指は探るように俺の弱点 鎮骨に向かつて伸びてくる。

そ、それ以上触られたらまた変な声がツ！
それだけはいやあツ……！

「わかりましたわかりました！ 許しますし責めたりしませんからそれ以上指下ろさないでえツ！」

「あらそつ、良かつた」

先生はぱつとこいつもの笑顔に戻つて浮かせていた腰を元の椅子に戻した。

「…………うひ」

「それにしても鎌骨が弱いなんて久城君つてば可愛いのねー」「…………もうどうとでも嗤つてください。ザつそり」

俺は本当にげつそりと俯いた。

「あら、褒めてるのに。ちょっと触つただけで感じてもらえるなんて久城君の彼女になる子はきつと幸せねー」

オッサンですか先生。

ていうか

「それ褒め言葉なんすか？ 聞き方によつては現状俺には彼女がないといふことを皮肉つているようにも聞こえるんすけど」「だつていないんでしょ？」

「なぜそれを！？ 僕そんなにモテない顔してますか！？」

結構本気でショックを受けながら叫んだのだが、先生はへらりと笑つた。

「君の『氣』には混じり氣がないからねー。きつとかうだと思つたのよ」

「…………『氣』？」

先生はコクリと頷いた。

「ついでだしその話に移りましょうか」

そう言つて先生は脇に置いていたホワイトボードを再び抱える。そこには『木、火、土、金、水』の5つの漢字が書かれてあつた。

「これが五行よ」

「はあ」

「万物はこの5つの元素から出来てゐるっていう中国の思想なんだけどね、私たちの間では属性の意味で用いることが多いわ」

「属性？ ゲームとかでよくあるあの属性つか？」

「そうそう。私の場合木の属性を持っているの。そして君からも同じ気を感じる」

「木、ですか」

「勿論属性を持たない『無』の人もいれば、複数の属性を持ち合わせて『混沌』となっている人もいるし、例外は多々あるんだけどね」

「へえ……。あ、じゃあ瑞葉は？」

すると先生はくすりと笑つた。

「ほんとに久城君は瑞葉さんの方が気になるのね」「だからそういうんじゃなくて！」

先生はひとしきり笑つた後、言つた。

「彼女の属は『滝』」

「彼女の属は『滝』」

「それ五行の中になくないつすか？」

「これが典型的な例外のひとつね。瑞葉さんの家は昔からこの神木町一帯を裏で治めていた主の家なの。私の家と違つて古い古い歴史を持つた伝統のあるお家なわけ」

「はあ」

「瑞葉の家ももともとは『水』の属だったんでしきうけど、その血を濃くして力を強めていつたんでしきうね。つまり一般的に言う『水』の属とは一線を画す力を持つているの。だから属も名を変えて『滝』」

「……超・水、って感じっすか」

「むしろハイパー・水つて感じね」

「ハイパーか。すごいな。」

「でもそれとあの腕となんか関係あるんすか？」

「俺が率直に尋ねると、先生は曖昧な笑みをこぼした。

「私も本人から直接聞いたわけじゃないから詳しくは知らないの……むう。この顔は何かしら知ってるけど言わないつもりの顔だ

な。

「本人に聞けつてことつすか？」

「まあそれが一番手つ取り早いんじやないかしら。でもあんまり女子の身体の話にズケズケと踏み込んだじや駄目よ？」

……う。

そんなこと言われたら訊きづらい。

ていうか、俺が訊いてもあの瑞葉が答えてくれるとは限らない。むしろ答えてくれない可能性のほうが高い気がする。

俺の思考を表情から読んだのか、先生は苦笑した。

「……まあ、あれが鬼の腕なのは確かね」

「鬼、つすか」

「そういえばその話の途中だつたわね。鬼にも色んな種類があると言つたでしょ？　さつき言つた五行の属を司る鬼が典型的な五鬼なんだけど」

「ああ、昨日瑞葉が言つてた『木鬼』つて、木の鬼つてことつすか」「そうそう。木鬼はもともと森に棲む妖精つて説があるくらい悪戯好きでね。昨日みたいに勝手に人間に憑いたりするのよ」

まるで他人事のように言う木村先生。

昨日のことは忘れないというのが本音なのかもしれない。

「火鬼は地獄を起源とするつて説が色濃いわね。そのせいか靈や強い念に惹かれやすいとか」

「なんか物騒つすね」

いやいや、と先生は首を振る。

「まだ火鬼はマシなほうよ。小物だつたら近くの靈を払えば消えてくれることもあるみたいだし。五鬼の中で一番厄介だと云われているのは実は土鬼なの」

「土の鬼、つすか。イメージ的に地味な感じがするんすけど」

すると先生は少し声を落として皮肉げに、なおかつ脅すように言

つた。

「あら、そんなこと言つたら土鬼チヌに殺されるわよ。」

「つむぎや？」

「この辺りに住んでる土行の古い家。今じゃもう大分廃れてるみたいだけビプライドだけはやたら高くて何かしら幅を利かせてくるのよねー。」

先生は心底鬱陶しそうにそっぽやいた。

どうやら個人的な恨みが何かしらあるらしい。

「おっと話が逸れたわね。とにかく土鬼は凶暴で、私みたく戦闘経験に乏しい若輩なんかは出会ったままず逃げると言われてるくらいよ。若氣の至りで果敢に挑んで散つていった同胞が多いんでしょうね」

「へ、え……」

具体的にそういう言われるとなんだか恐ろしい気がしてきた。

顔が蒼くでもなっていたのか、先生が慌てて付け足す。

「心配しなくても現代じゃあそつそつ土鬼になんて遭遇しないわよ。盛者必衰 力が強いものほど疲れやすいくつてことね

「はあ……」

でも、少しだけ引っかかることがあった。

昨日、あの木鬼がこぼした言葉。

『……何故ダ。土ノ匂イガスルノー』

やつぱり土つて、言つた氣がする。

それつて……

「おつと。そろそろ1限目も終わりね」

先生がそう呟いた途端、チャイムが鳴り響く。

と同時に遠くから地響きのような音が聞こえてきた。

木村先生に虜にされた奴らが競りよつに保健室へ向かってきているのだろう。

「先生、ありがとうございました！」

俺はすぢやりと立ち上がる。

これ以上長居したら先生のファンに睨まれる……とこつより袋叩きにされそうだ。

「どうも。また放課後にね」

先生は笑顔で俺を見送った。

E3・4・レッスン手鞠先生？（後書き）

ほとんどの会話ですみません。説明はいつも拙拙です。
明日もよしかしたら更新するかも知れません。いつもありがとうございます。

E3・5：vs木鬼

今は使われていない、プレハブの放送室。みすぼらしいその一室の真ん中に、この寂れた空間には似合わない黒いソファーがどんと置かれている。そしてその上に、当たり前のよう腰掛けている女が一人。

「おせえよ馬鹿。どこまつつき歩いてたんだ」彼女の開口一番は、そんな罵声だった。

「なら集合場所とか先に言つとけよ！ 朝とかシカトしたくせにー。」俺はカツとなつてつい反論する。だつて仕方のことなのだ。

今朝木村先生が『また放課後にな』と言つたから、とりあえず放課後保健室に向かつたのだ。

けれど保健室は閉まつていて、先生は留守。職員室で他の先生に聞いたところ、6限目の体育の時間に骨を折る大怪我をした生徒がいたらしくその付き添いで先生は郊外の病院にいるのだとか。

それで仕方なく教室に戻つてみたのだが、瑞葉の姿もなく。途方に暮れた俺はとりあえず教室に残つていたクラスメイトに瑞葉の居場所を聞きまわつたのだが知つている奴などいなかつたわけだ。

「わざわざ校内に残つてた連中にまで聞き歩いたんだぞ！！ 最終的にはタローさん今まで聞いたんだぞ！？」

瑞葉の居場所はそのタローさんに教えてもらつた。

ちなみにタローさんというのは校舎4階の男子トイレにたまにいる若い兄ちゃんだ。

「大体なんでこんなとこにいるんだよ。ここもつ使われてないんだろ？」

部室棟の1番端っこにぽつんと置かれているこのプレハブ。少し前まで職員室横の放送室の機材入れ替えの際に仮の放送室として使われていたらしいが、今はその役目を終えているはずなのだ。

「使われてないから私が使ってるんだろ」「

脚を組んだ瑞葉は堂々とそう言つた。

既にこの部屋は瑞葉のものと化しているらしい。

「それは流石に横暴じや……」

「久城のくせに難しい言葉使うな？」

「おま、どんだけ俺のこと馬鹿だと思つてんだよ！？」

すると瑞葉はふと考へる素振りを見せてから真顔で答えた。

「私が見てきた人間の中で1番馬鹿だと思つてる」「

……真顔で答えなくていいしそんなの。

俺がへたりとその場に座り込むと同時に、後ろの扉がカラリと開いた。

「お待たせー！ いや参ったなーほんと」「めんねー」

まるで飲み会に遅れてきたかのようなノリで入ってきたのは他でもない木村先生だった。

「ん？ どしたの久城君、骨抜かれたよつて座り込んじゃつて」

「……どうせ俺は骨なしの馬鹿ですよー」

薄青のカーペットにのの字を書く俺。

そんな俺を無視して瑞葉はすくりと立ち上がった。

「とつとと奴をおびき寄せるぞ」

「でも瑞葉さん？ 久城君を囮にするつて言つてたけど具体的には
どんな風に？」

先生の問ひに瑞葉はさうりと答へる。

「縛る」

……つて。

「ちょっと待てえ！！ なんだよ縛るつて、おい！？」

俺が思わずツツ「ミミを入れたときにはなぜか既に瑞葉の手には口
一握らしきものが握られていた。

「おい保健医、久城を押さえろ」

「はいはーい」

後ろからガシリと先生に肩を掴まれる。

「つて先生！ 何協力してんですか！？」

「じめんね久城君。今後私がこの町で商売していくにはやつぱ瑞葉
さんの言つことは聞いておいたほうがいいのかなーと思つのよ」
さめざめといつた風に先生は言つが明らかに声色は愉しんでいる。

「殊勝な心がけだな。さてどう縛り上げるか」

「はいはーい！ 私的には亀甲縛りとか生で見てみたいなー」

「いきなり高度な縛り方希望すんな。ちょっと待つてろ、今やり方
探す」

ポケットから携帯を取り出し片手で検索し始める瑞葉。

「やめんか変態どもーーーーー つわああああん

* * *

紺碧の空にかかる灰色の雲。

それしかない。というかそれしか見えない。

「 鬼に食われたら絶対あいつの前に化けて出でやる。
俺の恨み言がぼつんと校庭に響く。

……何が悲しくて夜中に朝礼台の上に磔にされなきやならんのか
ツ！！

しかもなんか結局ぐるぐる巻きだし！
瑞葉の奴意外と不器用だよなー！？

「…………」

虚しい。

俺がここに縛られてから一体どれくらいの時間が経過したのだろう。
小1時間くらいは経った気がする。

「 なあー」

もういいんじゃないかなー、と後ろの植え込みに隠れていりである瑞葉と木村先生に呼びかけようとしたそのとき。

「 見ツケタ」

異質な声が降ってきた。

「 !！」

次の瞬間、俺の上に覆いかぶさるように降りてきたのは隻腕の木鬼。

間違いなく昨日の鬼だ。

つーかなんでこいついちいち俺に覆いかぶさるんだよー！？

とその時、横からぐんと何かが伸びてきて木鬼を捕らえようと

た。

瑞葉の手だ。しかし

「つ

鬼は素早くそれを回避。どうも逃げ足は速いらしい。

「ち！ ちょこまかと！」

瑞葉が茂みから出でると同時に、その爪で俺のロープをブチリと切った。

鬼が現れれば俺の拘束を解く もともとそういう約束だったのだ。

「ハハツ」

木鬼はそんな笑い声を上げたかと思つと、昨日と同じように残つているほうの腕を瑞葉のほうへと伸ばした。

腕はそのまま蔓になり、瑞葉の腕へと絡みつく。

しかし勿論瑞葉は涼しい顔をしている。

「うつちの腕も無くしたいのか？」

そう言つて彼女が腕に力を籠めようとしたその時

「舐メンナヨ」

「！」

鬼の、昨日瑞葉が千切つたほうの腕が蔓となり彼女に向かつて伸びた。

「ツ！？」

その腕が巻きついた先は彼女の左腕。

鬼の腕でもなんでもない、普通の人間の腕だった。

「……あツ」

「瑞葉ツ」

あれはやばい。

あんなのに締め付けられたらそれこそ腕が千切れちまつ……！

が、俺が飛び出す前に別の人影が前に出た。

木村先生だ。

「金斬かなきり、任せた！」

「合点承知！」

すると素早い動きで何かが鬼の蔓の腕を断ち切った。

「！？」

鬼は驚いて後退する。

木村先生の側で宙に浮いているのは……小人？

「昨日瑞葉さんに言われたからねー。仕事のときは妖の一体でも取り込んでおけって」

先生はそう言つてそれの頭を撫でた。

「子ども扱いすんなやい！！」

その小人　金髪の、少年のような容姿をしている　は、木村先生の扱い方を突っぱねつつも頬を赤く染めていた。照れているのだろう。

「……貴様、『木』ノ屬ノクセニ『金』ノ妖ナドドウヤツテ手二入レタ」

鬼の問いに、先生は不敵に笑つて答える。

「私に憑いてたくせに知らないの？　リースよりース。情報と交換で、ね」

リース？　リースつてあの賃貸借リース？

じゃああの小人……妖は誰から借りてきたってことか？

「妖の貸し借りとは、最近の輩はなかなか洒落たことをしやがるな」

瑞葉も完全に拘束から解かれて、木鬼をにらみついている。

両腕を斬られた鬼は先生と瑞葉に挟まれた形になった。
誰がどう見てもこれで詰み。

……の、はずだつたんだが。

「！」

ぼけつと突つ立つっていた俺を、木鬼の眼が鋭く射抜く。

「あ

瞬間、まるで頭をズンと突かれたかのような衝撃を覚えて思わず
俺は後ろにのめつた。

そして。

「しまつ」

瑞葉か先生か、むしろ両方の声だつたような気もするがそんな声
が聞こえたと同時に、俺の意識はブツリと切れた。

E3・6：vs木鬼？

木鬼は人に憑くのを好む。

それが大前提だったにも関わらず、この場に来て2人は失念していたのだ。

久城標に鬼がとり憑く可能性を。

「ツ」

瑞葉茨乃はあからさまに舌打ちする。

対して木村手鞠も舌打ちこそしないが不愉快げに目を細めた。

「ははっ、すごいなこの身体。底が知れない。分からぬ。無知ゆえの無限、無垢ゆえの夢幻か？」

久城標の形をしたそれは機嫌よく、滑らかに言葉を発する。

「ここまで居心地が良いと手放すのは勿体無い」
まるで自己愛者のように、彼はうつとりと自らの手をその頬に寄せた。

せた。

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

木鬼は今だ恍惚とその手を眺め、そしてその身体に触れていく。

「はは、身体つきも丁度いい。人間の女の身体は脂肪が多くて動きにくいからな」

「……だつてよ、保健医」

「……ぶつ飛ばしましょつか、やつぱり」

すると鬼はにたりと囁つた。

「やれるものならやってみろ」

その挑発に乗つたのは手鞠だった。

「金斬！一発ぶちかましなさい！」

「ええ！？」

当の金斬が困惑している間に、鬼は一直線に2人のもとへと駆ける。

その速さは獸並みだった。

「ぶちかますつてどうすんだよ！？あれじゃ斬れねえだろ！？」

「ぶつかつて止めなさい！」

「は！？」

手鞠はむんずと金斬の身体を掴むと、高校球児顔負けの見事なフオームで彼を投げた。

「なああああ――――！？」

獣のように疾走していた木鬼と、まさに剛速球な金の妖が、正面から激突する。

否、激突したのは互いの『氣』だ。

物質的に触れる寸でのところで木と金の氣がぶつかり合っている。が。

「ぬわあつ」

勢いの点で自主的に走っていた木鬼のほうに分があったのか、金

斬はあえなく吹っ飛ばされた。

その際、一種の均衡状態が弾ける。自然と鬼の体勢も少し崩れていた。その隙に

「これでどうよ！？」

手鞠は腰から名刺サイズのカードを取り出し、それを数枚鬼のほうへと投げつけた。

(……あれは)

茨乃は目を細めその白いカードを凝視する。

それらはあるで意思があるかのように宙に浮いたまま鬼を取り囲み、光の線で円陣を生成した。

「ツー？」

途端、明らかに不自然に鬼の動きが止まる。

「符、ダと……！？」

手鞠が投げたのは『最新型』の属性護符だ。

属性護符は通常オーバードラクスな札の形をとつており、一枚につき1属性というのが基本だ。

しかしこのカードタイプは札のそれよりもコンパクトで目立たず、しかも一枚で全ての属性に対応している。

つまりところ携帯しやすいマルチな結界というわけだ。

「……ツ」

久城標の身体がブレる。

「苦しみたくないのならさっさとその身体を手放しなさい」

現在鬼を取り囲んでいる符の属は木と相克する金となつてゐる。木鬼と同じく木の属を持つ久城標の身体にも多少負担はかかるかもしれないが、普通の人間が鬼ほど純粹な属を持つわけでもなし、鬼だけをあぶりだす方法としてはこれが正攻法だった。

が。

「……！ 保健医、離れろ！」

「え？」

茨乃の忠告に、手鞠は一瞬出遅れた。

直後、青白い光が爆発する。

「きやあッ！？」

爆風に煽られた手鞠はそのまま植え込みにまで吹き飛ばされた。

「……子供騙しだな、こんなもの」

木鬼は息を吐きながら足元に落ちていたカードを踏み潰す。

「……つづー……」

植え込みが逆にクツショーンになつたのか、手鞠はそれに埋もれながらも苦々しく鬼を睨む。

「……いけると思ったのに」

ぼそりとそうこぼしたのは紛れもない本心だつた。

最新型であるカードタイプにも難があるのは彼女も知つていた。一枚で全属性に対応しているというのはかなり重宝だが、その小細工が入っている分出力は札タイプに劣るのだ。

しかし通常の鬼 まして木鬼となればカードタイプで十分止められると踏んでいたのだが。

「どうやら相当そいつの身体がしつくつ來てるみたいだな」

茨乃が前へと踏み出した。

鬼は肩をすくめて笑う。

「本当に良い依り代だよ、こいつは。もう数年熟せばつけ入ることすら難しかつたかもしないが、手に入ればこいつらのもの。弱卒と云われ続けた我らに未来を」

「ひとつ言つておくぞ、鬼」

鬼の言葉を遮るように、彼女は殺氣を放つた。

「　そいつは死ぬまで私のだ。貴様なんぞにくれてやるつもりはない」

その言葉に、鬼と、植え込みから抜け出そうとしていた手鞠は目を丸くした。
ただ啞然と。

しかしすぐに鬼は瞳つた。

「触れられもしないくせに威勢のいいことを言つのだな、娘」

「…………」

顔をしかめた彼女に、畳み掛けるように鬼は言つ。

「見えているぞ、その混沌が。今はどつにか均衡を保つていてるようだが、それも微妙なものなのだろう?」

手鞠はちらりと茨乃の顔色を伺う。

その表情は、とても苦い　いや、苦こと括りてしまえるほど單純なものではなかつた。

苦惱、絶望、羨望、切望。

その湧き出るような感情を押さえ込むよつて、彼女はきゅつと瞼を閉じる。

それを騒うよつて、鬼は続けた。

「お前が迎える最期はどれほどの苦痛に満ちて居るのだろうな?」

「 黙れ」

棘のような、碇のような、鋭利で重い声。

奈落よりも深い闇色の眼が、鬼を射抜いた。

が、鬼はそれを見て一層騒う。

とても、可笑しげに。

「その怒りは恐れの裏面か? それとも憧憬の片鱗か? ……良い、
實に良い!」

そう言い放つたかと思つと、鬼は俊敏な動きで茨乃との間合いを
詰めた。

「 お前の顔が歪み歪むのを拝みたくなったよ」
鬼はそここぼして茨乃の首へと手を伸ばした。

「瑞葉さんつー!」

手鞠の悲鳴に近い声が響く。

が、鬼の手は苗を掴むだけだった。

「!?

「その言葉、お前にそつくり返してやるよ」

鬼の背後から、声が聞こえる。

「な

鬼が振り向く前に、その肩を異形の手がガシリと押さえ込んだ。
そのまま彼の身体はうつ伏せに倒される。

「ツー?」

馬乗りのよつた形になつた茨乃是左手に息を吹く。

するとその掌に、極めて純度の高い『水』の気が宿つた。

「……つならともかく、貴様」ときは耐えられないだろうな

「ほんとうに、おまえの手が、もう止まらない。」
そういふと、彼女はその掌を彼の背中に押し当てた。

「ツ！」

鬼の身体が跳ねる。

「あアアアアアあああああー!?」

嬌声に似た、しかし絶叫。

身体に流し込まれる純度の高い『水』の気に、鬼は悶絶する。

本来、木と水は相生の関係にあり、木にとって水は不可欠のものであるが、それを享受しすぎれば腐ってしまうのが道理だ。

それと同じで、例え本来糧となるべき属の氣でも、格が違はずぎるものを一気に流し込まれてはその身がもたないということになる。

二〇

久城標の身体から、蒸発するように何かが飛び出し、霧散した。

一瞬で、形すら既になかったが、その何かがあの木鬼だといつこ

とは明らかだつた。

それが抜け出た途端、くたりと久城標の身体から力が抜ける。同時に、茨乃もふらりとその横に腰をついた。

夜のグラウンドが一気に静まり返る。

「……終わった……」

手鞠はほうと一息ついてから、2人の元へと歩み寄る。

「お疲れ様、」

手鞠は茨乃にねぎらいの言葉を掛けようとしたが、すぐに彼女の異変に気がついた。

「……っ、……は」

必死に抑えようとしているが、息が荒い。

胸に握りこぶし状態で、顔もどこか青ざめていた。

「瑞葉さん、大丈夫なの？」

「」との重大さに気付いた手鞠は思わずしゃがみこんで彼女の顔を覗き込んだが

「構うな」

彼女はそれを隠すようにふらりと立ち上がった。

「……小夜」

か細い声で彼女がその名を呼ぶと、いつもの通り、傍らに白い女が現れた。

青白い髪、白い肌、そして金色の眼。

明らかに人間離れしたその女が、いわゆる精霊と呼ばれる存在だと、手鞠にはひと目で分かった。

小夜は田の前にいる手鞠の顔と、その傍らでうつ伏せのまま横たわっている標を交互に見て首をかしげる。

「じつちの女はいいのよね？」

手鞠のほうを指差して、彼女は茨乃に尋ねた。

「そいはいい。同業者だ」

茨乃が短くそう答えると、小夜はやや面倒くさげに脚を伸ばして、

倒れている標を『ごろりと仰向けに直した。』
彼はまだ気を失つたままだ。

「……ん？」

その顔を見て、小夜は怪訝に眉をひそめた。

「ねえちょっと、茨乃」

「なんだ」

「これ、いいの？」

「何が」

小夜は苛立つてきたのかむんずと腕を組んだ。

「だからー、何度目よこの男の記憶消すの。偶然じゃないでしょ、
これ」

「……え」

手鞠はそこで思わず声を上げた。

「記憶、消してるの？ 久城君の？」

手鞠の問いに、茨乃是答えない。

だんまりを決め込む茨乃に代わって、小夜が言った。

「あんたもこっちの人間なら知ってるでしょうけど、この手の件に
一般人を巻き込んだ場合その記憶を消すのは当然のルール」

そのルールくらい、手鞠だって知っている。

けれど『記憶を消す』なんていうことは普通の人間には到底無理
なわけで。

「事件の痕跡を抹消し『なかつたこと』と思い込ませるか、もしく
はその一般人をこちらの世界に引き込むか。普通はそのどっちかで
しちゃう？」

手鞠がそう言つと、小夜は頷いた。

「まー凡人がとる手段なんてそれくらいしかないでしちゃうね。けど

私の場合人間の記憶操作が出来るから?」「

関わった人間の記憶は直接消せるの、と。

少々自慢げに、彼女は言った。

「ねえ、でも待って。さつき『何度も』って言つたわよね？ それ
つて何度も久城君が瑞葉さんの仕事に関わったってことよね？」

手鞠がそう尋ねると、小夜はそのまま茨乃のほうに視線を流した。
「私が言いたいのもそれ。2回目までは偶然で済ませられるとしても、
3度も続くと流石にねえ？ 私としてもいちいち出でてくるの面倒だ
し、いっそ」

「2度あることは3度あるって言つだら。お前が乐したいだけなのは
バレバレだ」

茨乃がぴしゃりとそう言つと、小夜は不満げに目を細めた。

「言つてくれるじゃない。こっちだって好きであなたの守りやつ
てんじやないってこと忘れないでよね」

そう吐き捨てるごとに、小夜は投げやりにその人差し指を標の胸辺り
に向けた。

「え、あ、ちょっとま」

手鞠の制止も虚しく、見えない何かが彼の胸を射抜いていた。

E3 - 6 : √s木鬼？（後書き）

なんかこの話すごい難産で茨乃並みに息が切れました。
あとやつとタテ書き小説ネットの網にかかつてほつとしました。
いつも読んでくださっている方々、ありがとうございます。

重い身体を引かざるよつて、少女はゆづくつと帰路を歩いていく。先刻、同業者である養護教諭に言われた言葉を思い起こしながら。

『記憶を消すつて言つても、きっとそのつむ縫びが出てくるわよ？それに久城君は自分の体質を受け入れてる。その彼にそこまでする必要があるの？』

(……そんなことは、分かつてゐる)
心の中で、茨乃是そういほした。

彼と夜に会つたのは、もう三度目。
まるで運命のように。

まるで、彼女が望んだみたいに。

しかし。

「…………ッ、またか」

前方にゆらりと浮かんだ影を見て、茨乃是憎らしさに悪態づいた。

心鬼 それも三四。

「…………なんでこんなときにして……」

茨乃是右腕を抑える。

今日はもう、それを使つ余裕などなかつた。

けれど鬼はゆるゆると彼女に近づいてくる。

その緩慢な動きですら、今の彼女には恐ろしく見えた。

「つ

彼女は逆の方向へと駆け出す。
完全な敵前逃亡だつた。

* * *

田を覚ますと、そこは学校の保健室だつた。

「…………れ？」

窓の外は暗い。まだ夜のようだ。

状況が掴めず、重たい瞼をこすつていると。

「おはよっ、久城君」

覗きこむように、木村先生の笑顔が降つてきた。

「！？」

驚いて飛び起きると

「あたッ！？」

体中が悲鳴を上げるように軋んで、硬直してしまつた。

「無理しちゃ駄目よ。貴方、鬼に身体を乗つ取られたとき相当人間離れした動きしてたから」

「え……乗つ取られた？」

先生の言葉に田を丸くする。すると先生は丸椅子に座つて苦笑した。

「やつぱり覚えてないか」

「…………え、いや、俺…………」

「ああいいのよ、気にしないで。精霊の御技だもの、人智を超えた暗示くらい出来るんでしょうねえ」

先生はひとりなにやら感心したように頷いている。

「あの、先生」

「ん？」

「瑞葉のやつはどうに行つたんすか?」

俺がそう尋ねた途端、先生は目を丸くして固まってしまった。

「あの、せんせ？」

「……つてちょっとまでーーい！ 何なの、君全部覚えてるのーー？」

「え、一も二つで、昨日逃げし七郎を捕まえるため二つ人ヶ窓をババ

ପ୍ରକାଶକ

先生に済がしていかれると校門に附
りたてて言ひよ

それだけ悔しげにじぼして脚を組んだ。

「なんなの、記憶消せるってのは嘘だつたの？ まったく大人をか

ふつぶつと愚痴をこぼしている木村先生。

「あのー、先生」

ん？ ああ、瑞葉さんなら先に帰らせたわよ」
帰らせた？

「あーほら、質問はまた今度。君ももう帰りなさい。身体ガタガタそれ」「…………」

卷之二

校舎の裏口から外へ出ると、いつの間にか雨がぽつぽつと降り始めていた。

いない。

俺は鞄を頭の上に抱えて歩き出す。

ふと校庭にある時計を見ると時刻は既に9時を回っていた。

ようりよりりと神木の夜道を歩いて帰る。

……それにしても脚が痛い。

筋肉が痛いのか骨が痛いのか、準備なしにマラソンを全力で走った後みたいな感じ。

この調子だと明日も響いているだろ？

ぐるぐる巻きにされたと思つたらいつの間にかことは全部終わってるし。

「……また瑞葉のやつ、なんの説明もなしに帰るんだもんなー」「これじゃあ巻き込まれた側としては納得できないとかしつくりこないといつか。

「…………」

ふと、脚が止まる。

『ほんとに久城君は瑞葉さんのことが気になるのね』

先生に言われて、からかわれた瑞葉。

確かに自分でも、何かおかしいくらいに気になつてる。

なんで？

そりやあ確かに顔は好みだけど、中身は想像してたのと大分かけ離れてるわけだし。

いや、別に気の強い女が嫌いってわけじゃないけどあれは気が強

いというより口の利き方が乱暴なわけで。

昨日初めてまともに喋つたつてのにいきなりあれだし。

まるで。

そう、まるで。

「……初めてじゃないみたいだ」

思わず口に出してそういう口づいたとき。

バシャリ、と。

前方で大きく水が撥ねる音がした。

「？」

思わず顔を上げると、そこに見えたのは水溜りにうずくまる人影。状況からして、その背後にある金網のフェンスを飛び越えたのだろつ。

そして。

「！」

そのフェンスの向こう側に見えるのは、鬼。

ようよろと、しかし確実に、複数の鬼たちはそのフェンスをよじ登ろうとしていた。

「つ

後ろを一瞬振り返り、つづくまつていたそいつは逃げるよひにちらに走つてくる。

しかし疲労しているのかその動きにもキレがない。

よく見ると……

「瑞葉！？」

逃げているのは間違いないく、彼女だった。

俺の声に驚いたのか、彼女はぱたりと立ち止まる。長いこと雨に当たっていたのだらつ、髪も制服も、全部ずぶ濡れだった。

「また説明もなしに消えたと思つたら何やつてんだよお前ー？」俺がそう言つと彼女は見開いていた目をさらに丸くした。が、すぐ悔しげに目を細める。

「小夜のやつ……わざと消さなかつたな」

そういひしていたら後ろのフーンスをとつとつ鬼が乗り越えてきた。

「つ

瑞葉は戦おうとはせず、そのままこちらに逃げてくる。が、3匹のうち最も身軽そうな小柄の鬼がフーンスを蹴つて彼女に飛びかかろうとした。

「瑞葉、伏せろ！」

俺が叫ぶと、彼女は反射的にその身をかがめていた。

鬼はそのまま彼女の頭上を通過して俺の方へと飛んでくる。

「こっちくんなツー！」

とつさにかざした拳で殴り飛ばすと、鬼は傍らの電柱にぶつかって伸びた。

が、瑞葉はそれを見て苦い表情を見せる。

「……やっぱり消えない」

残りの鬼2匹もわらわらとこちらに寄つてくる。

瑞葉は右腕をかばうように抑えた状態で、全くと言つてこゝほど

戦意が感じられない。

「お前、今腕使えないのか？」

「……見て分かんねえかよ」

「……ですよねー。」

「なあ、じゃああの鬼はどうやつたら倒せるんだ？ 今日の鬼とはまた別物に見えるけど」

「あれは心鬼だ。人の心中に棲む鬼。何ががきつかけで外に出てきたんだろうが存在 자체があやふやだから殴れば消えるはずだったんだ」

「……はずだった？」

ふとわざと電柱で伸びていた鬼を見ると、やいは既に立ち上がり再びこちらへ来ようとしている。

「殴つても消えてなくない！？」

「だからさつきから逃げてんだろ！」の馬鹿！」

「お前俺のこと馬鹿馬鹿言こすぎじやね！？」

「何度も言わすなこの馬鹿！ 今はそれどひこぎや……」

俺たちが喚き合っていると、ゾンビみたいに鬼が迫ってきた。

「あああもおおおー？」

情けない叫び声を上げてしまった、その時。

スパつと風が吹いたかと思うと、鬼達の身体に亀裂が入った。

「え？」

入ったかと思うと、あれだけ不気味だった鬼は跡形もなく消滅した。

「お前ら雑魚相手に何やつてんだー？」

宙から幼い声が聞こえる。

見ると、そこには

「お前、木村先生が連れてきてた…………カマキリ?」

「か・な・き・りだつ！ 名前くらい覚えとけッ」

金髪の妖精みたいなガキンちゃんは、ふかふかと浮いたままふんと鼻を鳴らした。

「悪い、助かつたよ」

「ひちが頭を下げるときつぱりすぐ機嫌を直したよ」

「にしてもお前ら、心鬼相手に何やつてんだよ？ このド素人っぽい兄ちゃんならともかく瑞葉の姉ちゃんなら余裕だろ？」
金髪のガキは心底不思議そうに瑞葉に尋ねた。

「…………」

瑞葉は渋い顔をして黙つたままだ。

「どうよ、顔色が悪い。」

もともと色白な奴だけど、今はなんというか、血の気がないというか。

「のまま放つておいたらそのつち倒れそうだ。」

「おい瑞葉、大丈夫か？」

俺が尋ねると、答えたのはなぜか金髪のガキで。

「兄ちゃん、そこは『大丈夫か』って訊く前に『俺の部屋に来いよ。温めてやるから』だろ？」

「…………」

瑞葉と俺は思わず沈黙した。

「ちゅッ！？ なんだよお前ら白に皿でひつち見んなよー。俺なん

か間違つたこと言つたか！？」

顔を真つ赤にするガキンちよは確かにガキンちよなんだが、なん

つーか、発想が古い。

古いつつーか今時ねえよそんなキザな台詞。

まあ、キザ台詞とか下心とかはこの際置いておいて。

「俺ん家近いから寄つてけよ、瑞葉」

俺が声をかけると、瑞葉は視線を足元にやつてじっと考え込み始めた。

…………その間が、長いのなんの。

ちょっと待て！

俺つてそんなに信用ないのかッ！？

「別に変な意味で言つたわけじゃないぞ！？　お前服びしょ濡れだ
しせめて服乾かして傘持つて帰れよ的な意味であつて特段あーだこ
ーだなんてなんにも、これっぽっちも考えてないからなッ！？
つてなんか余計なこと口走つてないか俺！？」

しかし。

「んな心配誰もしてねえよ」

ぱつりと、瑞葉は言つた。

嫌味とか、そんな余分な感情はその聲音からは全く感じられず、
本音だということがよく分かつた。

よく分かつたから、むしろ。

「お、兄ちゃん顔赤くなつてね？」

ガキの冷やかしに余計に顔が赤くなつた。

「るせつー！」

俺が吼えると奴はけらけらと楽しそうに笑つてあせつての方向へと飛んでいった。

どうやら本当の主人の元へと帰るらしい。

「……で、どうすんだ？」

照れを隠してわざと視線を合わせず尋ねると、瑞葉はふいと俺の脇を横切った。

「え、あ、ちょ、帰るのか？」

慌てて彼女の背中に声をかける。

すると

「お前ん家にな」

彼女ははつきりと、そう言った。

E3・5・帰路（後書き）

お久しぶりです。

サイマガ改訂も終わったのでこちらの連載に集中したいと思います。
どうぞよろしくお願ひします。

E4・波乱の//ナドナイア

「……散らかつてんな」

俺の家に上がつての、彼女の開口一番はそれだった。
「リビングは俺の部屋よりまだマシだ！」
何せ俺の部屋は足の踏み場がないからな！

「威張るな」

「へい」

……とまあ瑞葉を俺の家 もといお袋が親戚筋から格安で借り
ている築15年の一軒家 に連れてきたわけだが。

「……」

瑞葉がなんだかきょりきょりしている気がする。

「風呂ならあつちだぞ」

「それくらい水の気で分かる」

さいですか。

「じゃあ何きよろきよろしてんだよ」

「……この家、なんかいるぞ」

「え？」

「風呂借りるぞ」

「つておい！ 意味深な台詞残して行くなよー？」

瑞葉は俺の言葉を無視して脱衣所へと消えていった。

「……」

まあ、ずぶ濡れのまま待つても仕方ないし俺も着替えるだけ着
替えといつ。

その辺に置いたままだった洗濯済みの着替えを引き寄せて、雨で

べつとりと張り付いた上着とズボンをもそもそと脱ぐ。

パンツ一丁になつてから、身体を拭くタオルを用意していなかつたことに気が付いた。

置きっぱなしの洗濯物の中にタオルの姿はない。

「つれー、どつかなかつたつけ」

頭を搔きながらくるりと身体を回転せると。

「…………」

なぜか、そこに瑞葉がいた。

「わあ！？ なんでまだここにいるんだよ！？」

「……タオル。脱衣所になかつたから……」

彼女はどこか気まずげに視線を逸らした。

「……なんか、瑞葉の奴赤くなつてないか？」

「…………」

「フ、そうかそうか。俺の肉体美に見惚れ……」

「ぶフツ！？」

「早くなんか着るこのタコーーー！」

リモコンが顔にぶち当たつた。

* * *

「まだ顔痛いんすけど」

「お前が馬鹿なこと言つからだろ。ひとつと制服乾かせ」

「…………」

反論できず鼻をさすりながら彼女の制服にドライヤーをかける。

しかし制服つてのは乾きにへこな。

ちらりと壁の時計を見る。

時刻は一時ちょっと前。

普通の女子高生が出歩いていい時間ではないだらつ。

「……なあ瑞葉

「なんだよ」

「泊まつてくか?」

「…………せあ！？」

跳ねるように立ち上がる瑞葉。

「いや、深い意味はないんだけど」

「あつたら殺してゐ
ですよね。」

「じゃあ送つてやるよ。お前の家つてどの辺？」

「別にいい」

「せつかくこの神木町のオオカミ様が送つてやるって言つてゐるの
「だからなんなんだよそのダサい異名。つーかこの文脈で使つた前
じやねえだろそれ」

「？」

「…………もういい。馬鹿は黙つてろ」

「ああ、送りオオカミつて意味か」

「おせえよ」

「俺そんな男に見えるか?」

「見えねえな。馬鹿すぎで」

「そう言つてから、瑞葉ははたと口を押せえた。
けどもう遅い。

「だつたらいいだろ? 送つてやるよ」
よつやく乾いた制服を、俺は彼女に手渡した。

* * *

深夜。

にわか雨だつたのかすっかり雨は止んでいて、空には星が瞬いていた。

なんだかその空が、少しだけ懐かしい。

昔は夜出歩くことが多かつたから、よくこんな空を見ていた気がする。

気がつけば、彼女も時折空を見上げていた。

鬼を退治する彼女も、きっと夜中に出歩くことが多いのだらう。

「なあ、お前は鬼を退治していつてどうするんだ？」

「……いきなり重い質問すんな」

「重かつたか？」

「ん」

苦笑する。

どうも俺は空気が読めないらしい。

「……どうするも何も、終わりなんてないからな」

瑞葉がぽつりとそういぼした。

「久城。なんでこの地が神木町っていうか知ってるか？」

「えーと。でつかい神木があつたからだろ？でも大分前に落雷で焼けちまつたらしいってばあちゃんが言つてた」

瑞葉は頷いた。

「よくある話だが、その神木が長いことこの町の結界になつてたんだ。気高い数多の精靈を呼び寄せ、邪悪な鬼を寄せ付けない、そんな感じの」

「……へえ。じゃあ、木が折れたせいで鬼が現れるようになったの

か？」

「神木があつた頃も結界を破つてくる鬼はいたそうだが、木がなくなつてからは数が増えた。だからうちの家は鬼退治に力を入れたんだ」

瑞葉は一息つく。

「新しい神木でも出来ない限り、うちの家系はずつと鬼を相手にしていかないといけない。終わりはない。……笑えるだろ？」

笑えるだろ？ なんて言つわりに、顔が笑つてない。
そもそも笑えないし。

「鬼退治が嫌ならやめたつていいいんじやないか？ 木村先生みたいに進んで仕事にしてる人たちだつているんだろ？」

俺が言つと、瑞葉は肩をすくめた。

「うちの馬鹿姉はやめて家を出てつた」

「なら」

瑞葉は笑つた。

寂しげに。

「私の場合は、無理なんだ」

絶対に、無理なんだ。

彼女の表情が、そう告げている。

何か気の効いたことを言わないと。

そう考えて口を開こうとしたその時、爆音が聞こえてきた。

バイクの音だ。

個人的には懐かしい音だが、今思つと迷惑な音だ。

「……最近家の近くで馬鹿な連中がたむりつてんだよな。お陰で眠りにくいつたら」

瑞葉はさも迷惑ですといつた顔で俺のほうを見た。

「なんで俺のほう見るんだよ！ 俺が抜けたところはもう潰れたって聞いたぞ！」

「どうせ知り合いだろ？ なんかガツンと黙つて来いよ神木町のオオカミ！」

「ほひいつときだけその異名で呼ぶなー！」

ブーン。

しかし。

ブルルル。

なんか。

ブルンブルンブルン！

バイクの音、近づいてきてないか？

「……あーあ

瑞葉が諦観の境地のよつな声を上げた。

路地の向ひつから、複数のヘッドライトがやつてくる。

先頭には派手に改造されたオートバイ。

その後ろについてきているのは……全部ピンクのスクーター。

「……レディースか？」

ライトの眩しさに目を細めていると、そいつらは俺たちの前で一斉に止まつた。

「こんな夜中にドアーツたあ見せ付けてくれんじゃねーの」

猫モチーフのなんとなく可愛らしくヘルメットを被つたヘッドラ
しき女がバイクから降りる。

白の特攻服には、赤い文字で『羅武危機』と書かれている。

金髪ショートが風に揺れる。

特攻服スタイルこそあれだが、顔は美人だつた。

俺と田を合わせた途端、女はつり気味のその目を大きく見開く。

「お前、神木町の才オカ!!」……-?」

女がそこぼした途端、周りの子分がざわつきだした。

「隣町の最強番長を負かしたっていつあるの……」

「ひ、ひと晩で神木町の女100人を抱いたっていうあの…………！」

抱いてねえええ――――――

「……久城。めんどいからここでバイバイな」

瑞葉はうんざりした顔をしてさつと離れていく。

「おまけっておまえ！」

「待ちな

俺が止める前に、瑞葉を止めたのは金髪ヘッドだった。

「お前か？」神木町の才オカミをたらし込んで骨抜きにしたつてえ

女は

卷之三

瑞葉はげんなりと、死んだ魚のような田で金髪ヘッドを見た。

「なんだその日は？ やる気か、アア！？」

命知らずにもすじいメンチを瑞葉に切る金髪ヘッド。

「ちょ、ちょっと待てよ！ そいつ関係ないからマジで！」

俺が止めに入ると、金髪は鬼気迫る勢いで睨んできた。

「おい『ラ』でめえ！ 天に昇る龍の『ごとくその名を町中に知らしめたくせに今じやそんななつさけないツラ下げやがってよオ！－ 前に憧れてた奴らがどれだけ落胆したか分かるか、アア！？」

「……お前もそのひとりつてか」

瑞葉がはんと鼻で笑うと、金髪ヘッドは顔を真っ赤にした。

「なつ！？ そ、そんなわけないだろッ！ リリリのわたしがそんな」

……一人称改まるくらいには動搖してゐるな。

俺つて昔はモテてたのかなー。実は。

「とー とにかく！－ オ前は一発殴らないと氣がすまねえ！！
覚悟しなッ－！」

金髪ヘッドがそうまく立てた勢いで瑞葉に殴りかかった。
それをスイ、と軽くかわす瑞葉。

「つ、只者じゃねえな！？ どつした、かかつて来いよ－」
挑発をかける金髪ヘッド。

「……」

瑞葉は黙つて拳を避け続ける。

それに痺れを切らしたのか、金髪は大技に出た。

「……いい加減になッ－！」

まるでラグビーみたいに、瑞葉の胸に掴みかかる。

「－」

流石にそこからは逃れられなかつたのか、瑞葉は押し倒されてしまつた。

が。

「うっ！？」

次の瞬間には、金髪が宙で一回転して仰向けに倒れた。

「…………はー！？」

周りの子分たちは目を見張っている。
速すぎて何が起ったのか見えなかつたのだらう。

かろうじて俺の目が捉えたのは瑞葉の足技。

倒された時の勢いを利用してそのまま相手を蹴り上げたのだ。

「…………くう」

金髪ヘッドは負けを認めたのか仰向けのまま動かない。

一方瑞葉は地に片膝をついて、またしても汚れてしまつた制服を残念そうに手で払つていた。

すると

「…………よくも…………よくも姉様を…………！」

子分のひとり（しかも大人しそうな子）が血走つた眼で鉄パイプを手に瑞葉に襲い掛かつた。

「マミー！？ やめな！！」

慌てて金髪は制止したが、その声すら彼女の耳には届いていないらしい。

「うわあああああああー！」

ああもう毎日ドラかよー？

とつそに身体が前に出る。

次の瞬間

ガツン、と。

肩に衝撃が走っていた。

E4・波乱のリチャードナイト（後編）

更新速度遅くてすみません。
新エピソードに入りました。
いつも読んでくださっている方々、ありがとうございます。

E4-2・波乱のリバウナイト？

「…………つてー」
肩がじんじんする。

痛いというより痺れる感じ。

まあ、女子の腕力、じゃこれくらいか。

「…………」

すぐ田の前の瑞葉は、目を丸くしていた。
何が起きたのかまだ理解できていないような顔だ。

「…………あ」

カラソと、鉄パイプが地に落ちる音がした。
と同時に、

「マミー！ なんてことするんだ！」

ぴしゃりと、金髪ヘッドの怒声が響いた。

「…………う、だつて、姐様が負けるなんて……許せなかつたから…………」
「負けは負けだよ！ 相手の油断を狙つて鉄パイプで殴りつけるな
んで言語道断！」

「…………うううう」

「泣いても駄目！ 今度やつたら出でつてもいいつよー。」

「うわああああんそれだけは嫌ですうううううう

…………なんだあれ。

俺が呆けていると、金髪ヘッドが俺と瑞葉の前に正座した。

「…………すまなかつた。うちのもんが卑怯な真似をして

そして、頭を下げる。

完全に土下座だった。

「……いや、別に。怪我は特にないし……な？」

俺が瑞葉のほうを振り返ると。

「…………」

なぜか、彼女はすぐ不機嫌な顔をしていた。
それこそ世界が終わるそくなくらい。

「……当然か。自分の男が殴られてい氣になる女なんていないからね」

金髪ヘッドは勝手にそう語りつづけるが

「誰が、誰の、男で女だ」

瑞葉はより一層不機嫌にしき吐き捨てて立ち上がった。
俺も慌てて立ち上がる。

「あー、ちょっと待つてくれよー。」

すみとやつぱり、金髪ヘッドが呼び止めた。

「まだ何かあるのか？」

出来ればさっさとこの場を離れたい。

結構な爆音だったから、下手すると警察が来るかもしれないのだ。

が、彼女はどこか切羽詰った顔で俺たちを見つめていた。

そして。

「お前達に、頼みがあるんだ」

* * *

娯楽施設が極端に少ないこの街にも、昔はカラオケボックスとい
うものが存在していたのだ。

けどそれも3年ほど前に潰れた。

確か1年と持たなかつたと記憶している。

その潰れたカラオケの建物が未だ取り壊されずに放置されていたのは知つていたが、まさかそこがレディースのたまり場になつていたとは。

「まあ座りなよ」

旧カラオケのフロントにあるソファーに、言われるまま俺は腰掛けた。瑞葉はとつと腰は下ろさずソファーのへりにもたれて腕を組んでいる。

金髪ヘッドは一瞬苦笑したが、すぐに本題に入った。

「実はね、今うちのもんが1人悪い男に引っかかつてんだよ。それをどうにかしたいんだが……」

「つてなんだよそれ。めっちゃ内輪」とじやないか

思わず手も入れてつっこむと、いやいやと金髪ヘッドは頭を振つた。

「私だつて普通ならこの程度のこと、直接出向いて何とかするや。けど今回のは相手がね……」

……?

「相手が相当強いのか?」

「……ん、まあそれもあるんだが……それだけじゃなくて……」

金髪ヘッドはどこか言葉を濁す。

言つのを躊躇つているような、照れているような、なんとも言えない表情だ。

「なんなんだよ?」

促すと、彼女の後ろにいた自分の女が顔を赤くして言い放つた。

「あいつ、ヤバいくらいイケメンなんだつて……」

……せ?

呆気にとらわれている俺をよそに、口々に喋りだす女たち。

「ほんと、チヨーやばいんだって！ 見られただけで子供できやつなくらい！」

いや、出来ないだろ。

「あいつの周りいつも女が『ロロロロしてんだよ！』何人も侍らしやがつてムカつくつーかそれを通り越して混ざりたいつつーか」

「ちょ、ミコキてめえ何言つてやがんだよ抜け駆けする氣か！？」

「るせつー、アンタこそ前からメグのこと羨ましがつてたじやねーかよ！」

……。

……。

「…………てなわけや。女だとどにいつもこいつもこんな風になっちまうから困つてるんだ」

金髪ヘッドは溜め息混じりにそういほした。するとどこからか例の鉄パイプ女がモップを持って現れた。

「大丈夫ですわ姉様！ マミは男に興味なんてありません！ 姐様だけを想つて生きてますわ！」

「……マミ、罰のトイレ掃除まだ終わつてないだろ？」

「……はい！」

しょんぼりとした背中で戻つていく鉄パイプ女。

つかさつきのはわつきの何か問題なかつたか？

「とまあ真面目な話、私とマミへりいしかまともに動けないわけだよ。あの優男、腕も相当立つみたいでね、過去に女を寝取られた男共が何人も挑んだらしいんだが、どういつもこいつも返り討ちにされ

たとか」

「……ま、まじか。
ひでえ。まじでひどいなそれ。

「分かった、俺でいいなら協力するぜ」

「ていうかどれくらいイケメンなのかいつべん見てみたい。
そして一発殴りたい。

三次元にハーレムなんて存在してたまるかコンチクショオー！

「ほんとか！？ ありがたいよ」

金髪ヘッドの顔が綻ぶ。

「……意外だが、笑うと結構幼い顔になる奴だ。厚化粧なせいが年齢が読めないが、もしかしたら俺たちとそんなに変わらないのかもしない。」

「あんたはどうだい？」

金髪ヘッドは期待の眼差しで瑞葉の答えを促した。

が

「 パス」

彼女はただ一言やう言つて、踵を返した。

「え、ちょ、瑞葉！？ 殴りたくないかそのハーレム男！ 女として！」

「知るか。大体な、相手がどんな奴だろうが溺れるのはそいつの自由だろ。他人がとやかく言う筋合いはない」

瑞葉はそつけなく、しかし諫めるようにやう言つた。

が

「……確かにそうかもしれない。けど私は、ダチが悪い男にひつかつて弄ばれるのは我慢ならないんだよ」

金髪ヘッドはやつ言い切った。

両者、しばしこらみ合つ。

まるで虎と龍みたいだ。

ちなみに虎は金髪のぼつね。黄色いかひ。

「お、俺も金髪の意見に賛成……」

「馬鹿なガキは黙つてろ」

「馬鹿なガキ！？」

「他人の色恋沙汰に踏み込めるほど経験ねえだり

「あ、あるし！ あるもん！」

しかしあつぱり瑞葉には鼻で嗤られて。

「もう一度言つたぞ、金髪。ダチだかなんだか知らねえけど、要するにそいつはお前らをほほえらかしてその男に走つてんだろ？ そんな奴を連れ戻す価値があるのか？」

瑞葉は金髪に問う。

金髪は一瞬、顔をこわばらせた。

が、すぐに口元を緩める。

「……あんた、ダチがいなatypeだね」

「……うつわー、すごーいこと言つなー。

まあ確かに瑞葉つてクラスでも浮いてるヤジロー。

「私は最初から、ラブクライシス羅武危機のメンバーとしてあの子を連れ戻すつもりはない。メグは中学生時からの親友なんだ。それだけだよ」

それを聞いた瑞葉は

「……勝手にしろ」

それだけ言って、建物から出て行つた。

「悪かったね、オオカミ。私は別にあんたを拘束するつもりはないよ。あいつみたいにバスしたつていい」

「い、いや！ 男に一言はない！ 僕は手伝つ

すると、金髪はほつとした笑みを見せた。

「そつかい。……正直ちょっと不安だったんだ。あんたがいてくれて助かるよ」

俺のことを信頼しきつてる、そんな笑み。

「お、おう」

……なんか照れるじゃねえかよくそう。

こいつのスマイル、木村先生と案外良い勝負かもしれん。

照れ隠しに、瑞葉が出て行つた出口のほうをふと眺める。

「……瑞葉の奴、きびしーよな」

「そういう奴なんだ？ あいつの言ひことも筋は通つてゐから、別に恨みはしないけど」

でも、何か少し引っかかった。

あいつなら、手伝ってくれそうな気がしたんだ。

なんでそう思つたのかは、自分でも分からぬけど。

* * *

「おかえりなさい！ 茨乃姫さま！」

深夜 それも明け方近く、そんな時間に帰宅した主人を、それ

でも彼は笑顔で出迎えた。

「まだ起きてたのか、闇里アンリ」

「はい！ 僕はここから動けないので、せめて姫さまがお戻りになるまでは起きていようと、姉さんと一緒に深夜番組を鑑賞しながらお帰りをお待ちしてました！」

闇里と呼ばれた青白い髪の少年は、眠氣を全く感じさせないハツラツとした表情で答えた。

おそらくは教育上よろしくない目の冴えるような番組でも見ていたのだろうが、茨乃はあえてそこには触れず、

「なら小夜も起きてるんだな」

「え、あ、はい。リビングにいますけど……」

それだけ聞いて、彼女は真っ直ぐリビングへと向かつた。

「おい、このクソ馬鹿女」

部屋に入るなり、彼女はそんな言葉を吐き捨てる。

「あんたさー、仮にも瑞葉のお嬢なんだからさー、その言葉遣いなんとかなんないわけー？」

そう返す女も女で床にだらしなく寝転がっていた。

寝転がっているだけならまだしも女の服は妙ちくりんながらも和装だ。そんな格好でだらだらと床に寝転がれば着崩れるのは当然で、脚はあらか胸まで大いにはだけてしまつているが本人はとんと気にしていない。

「なんで命令を守らない」

「だつて別に私、あんたの守護精霊でもなんでもないしー」

「お前達の本体は瑞葉の家にあるんだぞ」

茨乃が低い声でそう言つと、小夜は薄く嗤つた。

「脅そつたつて無駄よ？ あんたの父親は中途半端なところで私たちを壊せない。私には役目があるもの」

茨乃是溜め息をつく。

「……お前にとつたら今の状況のほうが好都合なんだろうな」
再びごろりと転がつて、小夜は茨乃を見上げた。

「苦しい？」

無邪気な顔で、彼女は尋ねる。

「…………痛いよ」

茨乃是そのまま自室へと足を向けた。

「あ、あのー、茨乃姫様！！」

自室に戻ろうとした彼女を、闇里が呼び止めた。

「あの……姉さんが勝手なことしたならすみません。僕が謝ります」「謝るくらいならお前の馬鹿姉を私の言ひとおりに動くよつ説得してくれ」

半ば諦観が籠もつた溜め息を吐きつつ茨乃が言ひと

「それは、無理です」

遠慮がちながら、しかしあはつきりと彼は答えた。

「姉さんと意図は違うかも知れないけど、僕も彼の記憶は置いておいてほしい、です」

「…………なんで」

「きつと、そのほうがいいからです」

「答えになつてない」

会話を打ち切るように、茨乃はバタンと扉を閉めた。

やれやれと、茨乃はベッドに横になる。

今日はもううつござりだ。

無理はしたし、ずぶ濡れるし、変な女と乱闘になるし。
それ以上。

「…………こちいち厄介なことに巻き込まれてんじゃねーよ、馬鹿」

「…………いらない相手に、彼女は秘かに毒づいた。」

E4 - 2・波乱のリチャードナイト?（後編）

更新遅くてすみません（こつも書かれてる所がある）
いつもよりスピードアップできるよう頑張ります（当社比）。
いつも読んでくださっている方々、ありがとうございます。

E4・3・疾走バッドモーニング

眠い。

超絶、眠い。

「今日はいつもにも増して眠そうだな、久城」脇谷がいつもの通り突っ込んでくれる。

「昨日はいろいろあつてな」

すると脇谷は目を輝かせて訊いてくる。

「お、なになに。元カノが復縁迫って家に押しかけてきたとか？」

それで一晩中眠らしてくれなかつたとか？」

「どんなどよ。てか脇谷、だるそうにしてる俺を見てお前はいつも何を想像してるんだ」

「熱い夜。甘い吐息」

「……お前結構口マンチストな」

「男つて皆そんなもんだろ」

「まあな」

……しかし今日はマジで辛い。

結局昨日はほとんど一睡も出来ていないので。

といつても脇谷が言つのような男女のあれこれがあつたわけでもなく、単にあの金髪ヘッドと例のイケメンをどう潰すかという計画を練つてただけで。

「あーもう無理ー」

もう少しで授業開始だが、あまりにも瞼が重いので思い切つて席を立つた。

「あれ、ばっくれんの？」

「保健室にな」

普段の天使な木村先生なら一時間くじけベッド貸してくれるよな?
と期待しつつ俺はふらふらと教室を出た。

* * *

「あら久城君。おはよう

漂うのは優雅な紅茶の香り。

保健室に入ると、木村先生がちょうどマグカップに口をつけようとしていたところだった。

1限目開始のチャイムが鳴って、部活の朝練で怪我しただのなんだのと訴える連中のラッシュが終わった後のティータイムなのだろう。

「久城君も紅茶いる?」

「んー、頂けるな!」

うつらうつらと頭を揺らしつつ答える。

「やけに眠そうね。昨日遅かったの?」

「んー、あれから色々あって……」

ああ、喋るのも億劫になってきたぞ。眠気がやばい。

「色々?」

しかし木村先生は気になつたよつて掘り下げるよつて尋ねてくる。

回転しない頭で俺は断片的に言葉を纏つた。

「瑞葉と会つて……濡れてて……風呂入つて……もみ合ひになつて

……一睡もできませんでした……」

「? ? え、なにそれ寝たの?」

「……いや、だから寝てないんですってば……」

……ぐづ。

* * *

次に田を覚ましたときは、半刻ほど時間が経過していた。

「死んだように寝てたわね」

俺の顔を見て苦笑する木村先生の手には、田覚まし用の缶コーヒーがあつた。

「はいこれ。どうぞ」

「あ、あつぞーす！」

短期集中で眠つたせいか頭がさっぱりした気がする。

これでこのコーヒーを飲めば今日一日はなんとか凌げそうだ。

「で？ 濡れた瑞葉さんとお風呂に入つてもみ合いつこになつて一睡も出来なかつたってどういう意味？」

「ブハッ！？」

「な、なんすかそれ！？」

「あら久城君が言つたんぢやない」

「言つてません！ てか言つたかもしれないけど妙に超訳してません！？」

「あらバレた？」

「てへ、と舌を出す木村先生。

この仕方のない先生に、俺は昨日の出来事を一部始終話すことになつた。

「それ、鬼ね」

俺の話が終わつた後、木村先生はぽつりと呟ついた。

「そうそう。昨日の瑞葉、金髪にダチを見捨てろみたいしたことつて鬼みたいだつたなつて」

「じゃなくて。その男がよ」

「へ？」

「どうして？」

「俗称色鬼。夢魔が形を成したようね」

木村先生は少し深刻そうな顔で俯いた。

「いりおに？ むま？」

「淫魔って言えば久城君にも分かるかしら？」

「……う」

笑顔でそれ言つのぞむこな。

「いや待てよ？」

「つてことは、素人が挑んで勝てる相手じゃないってことですか？」

「そうね。正直無理ね。絶対無理ね」

「う」

「だから瑞葉さんも止めたんでしょうけど。でも結局止められなかつたつてことは……」

ふと、木村先生は苦い笑みを見せた。

「瑞葉さん、今朝教室にいた？」

「――」

眠くてふらふらしてたからあんまり見てなかつたけど。
教室の隅、彼女の席は
「……空いた」

気付けばよかつた。

もつと早く。

だつてあいつ、昨日本調子じやなかつたのに。

慌てて保健室から出ようとする俺を

「ちょっと待つた久城君！」

木村先生が声を張り上げ制止した。

「言つたでしよう？ 素人の貴方が行つても返り討ちに遭つだけよ
先生にしては珍しく、真摯に棘のある言葉。

「でも……」

「中途半端な気持ちで鬼に関わっちゃ駄目。どうしても関わりたい
のなら君は覚悟を決めないと」

先生の眼が俺を見透かしている。

俺には確かに、『覚悟』がない。

幽霊とか、鬼とか、存在こそ否定はしなくなつたものの、積極的に
関われる自信はない。

だつて、それは恐怖の対象だったから。

けど、なんでだろう。

鬼の腕を持つ瑞葉を、恐れることはなかつた。

それを思つたび、ふと考えるんだ。

俺は、彼女をもつと深く知つてたんじやないかつて。

「俺やつぱり気になるんで行きます」

「駄目つて言つたら？」

「それでも行きます」

「……言つじやない」

「んじやー」

先生にびしりと敬礼して、俺は下駄箱へと急いだ。

* * *

「姉様、姉様。オオカミとの待ち合わせは夕方ですよね？　いいんですか、もう乗り込んじゃって」

「乗り込むんじゃないよ。あくまで偵察だ」

まだ空氣も澄んでいる平日の中。

電柱の隅に隠れるように、2人の女が佇んでいる。

神木町の新星レディース、ラブクラッシュ羅武危機のヘッドとその子分だ。

普段なら彼女らも学校に通っている時間なのだが、決戦日である今日は勉学など手につくまいと、応援を求めた久城標と落ち合ひ前から敵の偵察にやつってきたのだ。

「……しつかし相変わらず趣味の悪い屋敷だねえ」

金髪ヘッド　もとい倉井愛子は憎憎しげに敵の本拠地を見上げ

た。

ひと言で表すと、そこは豪邸。

もしくは幽霊屋敷。

「聞いたことがあるんですけど、この屋敷つてどっかの国の変な芸術家が建てた家でー、その芸術家が発狂して自殺して以来誰も寄り付かなくなつたのに、ある日突然どつかの物好きが買い取つて、今はあいつが住んでるんだとか」

「いかにもな話だねえ」

門が、そもそも悪趣味なのだ。

言つてみれば地獄の門。

建物を飾るものは全て悪魔やらにやら、そういうたブラックなイメージのものばかり。

「……なんでこんな屋敷に住んでるような奴にハマッちまうんだか

愛子が深い溜め息を吐いた、その時。

ガシャン、と。

屋敷の中から派手な音が聞こえた。

「！？」

「なんの音ですかね？」

ガラスが割れるような音にも聞こえたが、それにしても音が大きかつた。

もつと大きなものが壊れたような、そんな異音。

「中で何か起つてる……？」

* * *

「ああ。その装置高かつたんだけどね」

男は微笑を湛えつつも、決して笑わない眼で彼女を見た。
目の前にはベッドほどの大きさの円盤型の装置が見るも無惨な形に破壊されている。

「現代の夢魔つてのは堕ちたもんだな。こんな機械に頼らないと本領を発揮できないのか」

破壊した当人 瑞葉茨乃是冷ややかな視線を男に返す。
男の周りには数人の女が転がっていた。
装置による幻覚の作用が切れて気絶しているのだ。

「確かに、私は本来形を持つべきものではないもの。ゆえに形を得て以来制約も加わった」

夢魔とは本来、人間の夢に現れる形なきもの。

形がないからこそ人間の夢に現れることができると言える。

つまり、形を持った時点で人間の夢には入ることができない。

それを擬似的に可能にしたのが、人間に幻覚作用をもたらす「この円盤型の装置だった」というわけだ。

「だったら貴様はどうして形を成した?」

茨乃の問いに、男は一瞬複雑な笑みを見せた。

「それは言わない約束でね」

「……約束?」

「レイディ、お喋りはおしまいだ」

そう言い放つた途端、男の姿がブレた。

「…」

目前に迫った男を振り払おうとするも、男の想像以上の怪力に鬼の腕は阻まれた。

「ツ」

男は彼女の耳元で囁く。

「そういえば伝えていなかつたね。多人数の相手を一気に墮とすにはあの装置が必要なんだが、一人くらいならこの眼でどうにかなるんだよ」

「!?」

「君は芯が強そだから、きっと良いものがどれるだろ?」

逃れる術はすでになく、鬼と彼女の視線がぶつかった。

E4・3・疾走バッドモーニング（後書き）

敵に関して「」の題材で全年齢対象のまま乗り切れるかが今回の試練です（ ）。

次話にそマシな更新頻度で行きたいと思います頑張ります。
いつもめげずに読んでくださっている方々、ありがとうございます。

E4・4・特攻ホーンテッドハウス

俺が全力疾走でイケメン男の屋敷前に辿り着くと、そこには既に金髪ヘッドと鉄パイプ女がいた。

「なんでお前らここにいるんだー？」

「それはこっちの台詞だよ！ まだ昼間じゃないか」

俺がこの時間に来るとは思つていなかつたのだろう、金髪は田を丸くしているが、それとは別にどこかそわそわしているのが分かつた。

「何があつたのか？」

「いや、ちょっと前屋敷の中から変な音が聞こえてさ」

「変な音？」

「がしゃーんって感じの派手な音でしたよ」

瑞葉の奴、もう乗り込んでるんだ。

「お前らここに残つてろよ、俺、中見てくるからー。」

「え、ちょっとオオカミーー？」

屋敷の門に鍵はかかっていない。

何を考えることもなく、正面から入ることにした。

色々な意味で趣味サイアクな玄関扉を開け放つ。広がつたのは無人のロビー。

「おーー！ 瑞葉ーー！」

呼んでも彼女は返事などしないだろうが、それでもこの屋敷の中にいれば俺が来たことが分かるだろう。

「……て」

分かつたところで何がどうなるんだ！？
ていうか俺は何をしたらしいんだ！？

「やつべ考えてなかつた！」

思わず入ってきた扉のほうを振り返ると
「何を考えてなかつたって？」

「まさか作戦もなしに乗り込んだんですかー？ 頭わるーい」
金髪ヘッドと鉄パイプ女がそこにいた。

「ちょ、お前ら入つてくんなよ！」

「はあ？ 昨日の段取りじやあ3人でリンチかけようつて話だつた
じやないか」

「フルボッコの練習だつてしてきたんですよ？」
確かにそつだつたけど！

「だから！ 事情が変わつたんだつて！ いいか、よく聞けよ……」
2人を説き伏せようと言葉を探すが、気の利いた嘘が思いつかない。

相手は人間じゃないなんて言つたつて、こいつら絶対信じないだ
ろうし……。

「どうじうことさ？」

「はつきり言つてくださいよ」

2人が段々と痺れを切らしててきたのが空氣で分かる。

「だから」
俺がもたもたしていると。

「今日は客人が多いな」

静かなロビーに、低い男の声が響いた。

「！！」

正面の階段からゅつたりとした足取りで降りてきたのは白いスース姿の優男。

キザつたらしい格好だが、それを着こなせるだけのプロポーションを十分に兼ね備えている。

時代錯誤なオールバックのくせにそれがこの上なくカッチリと似合っているものだから何も言えない。顔もこれまた憎たらしくらいに整つたバーツが貼り付いていて、正直絵画かなにかを見ている気分になる。

要するに。

「確かにイケメンって言われるのもわかりますけどー」「

オトロニキヨウミナイ発言をしていた鉄パイプ女ですらも悔しげにそうじましたほどなのだ。

「お褒めに預かり光栄だよ、レイディ？」

「れ、れいでい？」

「ほ、褒めてないですーー！ 姐さまこつきもしーーー！」

鉄パイプ女は逃げるよつに金髪ヘッドの後ろに隠れた。

「ちよつとあんた！ 町中の女をたぶらかして何のつもりだい？」

金髪ヘッドは一步前に踏み出して叫んだ。

「たぶらかす、とは人聞きの悪い。私はただこの町の女性の満たされない心を埋めているだけなんだけね」

男はわざとらしく肩をすくめた。

「はー？ とにかくうちのメグを返してもうつよー。ギリギリのんだいーー！」

「メグ……ああ、あの子か。あの子なら今頃夢の中かな。けど駄目だよブロンドのレイディ。彼女達にはまだやつてもらわないといけないことがあるんだ」

「なんの話を……」

話が読めずに困惑する金髪に、男は優しく口づけた。

「君達にも手伝つてもらおうかな。何、悪いことなんて一つもない

話や。君達はただ、夢を見ていろだけでいいんだからや。」

「――」

途端、空気が張り詰めた。

「やる気かい！？ 上等だ――！」

金髪ヘッドが臆せらず飛び出す。

「ちょっとま

俺の制止なんてあいつは聞いやしない。

「食らいなッ！」

金髪が男に向かつて球状の何かを投げつけた。

「？」

男は軽く横に動いただけでそれをかわしたが、地面に当たつて爆ぜたその玉の内容物は思いのほか派手に飛び散つて

「！」

男の靴と地面をくつつけた。

「……接着剤、だと？」

男の動きを止めた金髪はにやりと笑つて男に拳を振るひ。

「ツ」

一発、メキつと決まつてしまつた。

……意外といけるんじやね？

そう、思いかけたのもつかの間。

「！」

奴の、動かせないはずの足がバリッと音を立てて剥がれたのが分かつた。

そのままその脚は宙に上がる。

「危ない！」

思わず両者の間にに入る。

「 ッ 「

間もなく、容赦ない男の蹴りが腹に直撃。その勢いで金髪を巻き込んでふとばされた。

「 」 『ふつ』

肺から空気がどつとこぼれる。

……あの野郎、本氣で蹴りやがった。

「 ちょ、ちょっと！ 大丈夫かい？」

「 ……へーきへーき」

「 全然平気そうじやないよ！ 顔色悪いじゃないか！」

確かにちょっと肋骨いつたかもしれないが、心配そうに声を掛け
る金髪のほうこそ顔が蒼い。

蹴りひとつでここまで破壊力があるとは思わなかつたのだらう。

「 おや失敬。どうも加減が出来なくてね」

いけしやあしやあと奴は言うが、あれは絶対顔を殴られて一瞬本
氣で怒つたに違ひない。多分そうだ。

「 ……ッ、やつてくれるじゃないか」

金髪が再び立ち上がる。

が、その手は微かに、本当に微かに震えていた。

「 君のほう」そ仕掛けまで用意して会いに来てくれたとは光栄だよ

？ それに拳もなかなかだつた

男は殴られた頬をさすりつつ嗤つた。

「 けどそろそろ眠りの時間だね」

「！？」「

次の瞬間、金髪ヘッドは前触れもなくその場に倒れた。

「な

何をされたわけでもない。

ただ、奴と目を合わせただけなのだ。

「姉様！？」

鉄パイプ女が金髪ヘッドを慌てて揺さぶるが、彼女は深い眠りに陥っているようで目を覚まさない。

「てめえッ！ 姐様に何をしたアツ！！」

冗談抜きに鬼のような形相で男を睨み付ける鉄パイプ。

「おつと、可愛い顔が台無しだよレイディ」

男はしれっとそう言つて再びその視線を彼女と合わせた。

が、

「ああ、この手の娘は少し難しいな」
ものの数秒でふと残念そうにそりこぼした。

……あれってつまりあの怪しげな術はこの子には効かないってことだよな？

理由はともかく。

「おい鉄パイプ！ そいつ背負つて外に出ろ！」

「ハア！？ 馬鹿言つてんじゃねーよ姉様の仇前にして尻尾巻いて逃げろつてのか！？」

「その大事な姉様の安全が第一だろ！？ いいから外に出ろーーー！」

「……ッ！」

俺の言葉に一応は納得したのか、鉄パイプ女は悔しげな形相のまま金髪ヘッドを抱え始めた。

半ばのうのうと、それでも外に出て行つた2人を確認して、俺は

奴と向かい合ひ。

「おー。瑞葉はどうだ」「だ

「瑞葉？ セービの子だったかな」

「今朝乗り込んできただろ！！」

俺が声を荒げると、奴はああと納得したように頷いた。

「あの鬼の腕の子だね。上にいるよ。どうも堕ちるのに抵抗してゐみたいで調教中だけね」

……！？

「ちょ、なんだよそのちょ、調教つて！」

俺の頭が馬鹿なせいかもしれないがその言葉を聞いたらなんだかアブナイことしか思いつかない。

「知りたい？ だったら君にも特別、教えてあげようか

「ツ、いらねーよこんちくしょー！…！」

そのまま駆け出す。

俺は金髪みたいに小道具も何も用意していない。
ただ無防備に、馬鹿みたいに前に向かつて走る。

「無駄なことを

男は怖氣ず堂々と立つたまま。

俺は拳を固めて

「！？」

奴の脇をかいくぐった。

一田散に階段を駆け上がって、2階へ上がる。

2階はまるでホテルのフロアのように似たような扉が並んでいた。
瑞葉がどの部屋にいるかなんてわからない。

が、一つだけ扉が半開きになっている部屋があつて、俺は何も考

えず」にそこを目指した。

「瑞葉ツ……」「

部屋に入ると、そこには何か機械的なものの残骸と、その傍らで壁にもたれかかるように倒れている少女の姿が目に入った。ここからじや顔は見えないがあるセミロングの髪は間違いなく瑞葉だった。

「瑞葉ツ」

彼女に駆け寄ろうとしたら

「そこまで、だ」

いつの間に追い越されたのか、俺の目の前に白いスースのあの男が現れた。

「ツ」

ガシリと首元を掴まれる。

「彼女にはあの装置を壊された分、しつかり補つてもらわないと困るんだ。調教が終わるまで起こしてもらつては困るなあ」

「なに、を、おぎな……」

「言つてみれば生命力、かな。あちらの都合で女性のもの限定だったんだが、しかし君もなかなかいいものを持っていそうだ。試しに搾取してみたい」

次の瞬間、俺は目を見張った。

男の顔が、一瞬で変化したのだ。

いや、顔だけじやない。腕も、身体も全部、女のものに。妖艶な女は、その妖しい眼で俺を射抜いた。

「――！」

途端、がくんと崩れる身体。

意識が上に引き剥がされるように消えていく。

「 良い夢を、坊や」
女は優しくそう言つた。

E4・4・特攻ホーンテッドハウスマーケティング（後書き）

なんか意識断絶で話が切れる話が多い気がするのは私の気のせいではないのでしょうか（）。

なんかまだ迷走してる感あります更新頑張ります。いつも読んでくださっている方々、ありがとうございます。

E4・5・白昼ナイトメア

田を覚ますと、辺りはすっかり暗くなっていた。

「……あ、やべ」

まだ重い瞼をこする。

時刻はもう午後7時。

教室には当然、誰もいない。

昨日は徹夜だったから、日中眠気に耐えられなくて、結局教室掃除が終わった後からずっと自分の席で居眠っていたことになる。

ほとんど一日寝ていたというのにどうも頭がすつきりしない。さつさと家に帰つてちゃんとベッドで寝よう。

そう思つて横にかかっている鞄に手をかけたその時

カラリと、教室の扉が開いた。

「あ

暗い室内でも、入ってきた人物が誰なのか俺にはすぐ分かった。

「瑞葉？」

彼女は返事はせず、その代わりこちらに歩いてきて俺の前の席に座つた。

「お前こんな時間まで寝てたわけ？」

頬杖をついて、呆れたように尋ねてくる。

彼女から話しかけてくるなんて、今日は機嫌がいいんだろうか？

「気付いたらこんな時間だつた

「授業中も散々居眠つて怒られてたくせに」

「だつて睡魔には勝てねーしさー」

「んな眠いなら学校休めよ」

「サボりはしないって月子先生との約束だから」

「？ んな教師いたか？」

「あ、中学のときの先生な」

「ふーん……」

会話がそこでなぜか途切れた。

なんとなくだが瑞葉の機嫌が悪くなつた気がして俺は慌てて話題を替えた。

「瑞葉はなんでまだ学校にいるんだ？ お前部活入つてなかつたよな？」

「いたら悪いかよ」

……う。やっぱ機嫌悪い？

俺なんかまざいこと言つたかなー……

「 ウソ」

「へ？」

「お前が起きるの待つてた」

彼女の不意打ち発言に、思わず胸が高鳴つた。

「え、なん、でイつ？」

額に軽く手刀が飛んでくる。

「言わせるか？ フツー」

瑞葉の指先はそのまま俺の喉元まで下りた。

まるで喉元に銃口を突きつけられるみたいな感覚。
けど覚えるのは恐怖じゃなくて、もつと別の、そつ、どこか期待
が入り混じつた、そんな複雑な感情だった。

思わず喉が鳴ると、瑞葉はそれを見透かして艶やかに笑う。

そして、まるで猫でもじやらすように俺の喉をくすぐり始めた。

「あの、ちょ……」

困惑半分、気持ちよさ半分の声を上げる。

「ん？」

瑞葉は適当に流すだけで、手を動かすのをやめない。

そして、その指は着実に下へ下がつていって、

「ツ」

俺のウイークポイントである鎖骨に至った。

「お前ほんとに弱いのな、こい」

瑞葉はからかうように言つた。

思わず田を瞑つてしまつた自分が恥ずかしい。

「み、瑞葉だつて弱いとの一つや二つあるだい。」

俺が躍起になつて言い返すと、

「なら探してみるか？」

彼女はあくまで挑発的に、そう言い放つた。

え。え。

探してみるかつて……

「つひーじー、何制服に手かけてんだ！」

田の前の光景を見て思わず眠気が吹つ飛んだ。

瑞葉が制服の上着を脱ぎ始めたのだ。

「だつて服の上からじゃ分かりにくいだろ？」

さも当然とばかりに瑞葉はさつと上着を脱いで、さらさら

「ちょー！ ちょっと待つたーー！」

田いシャツのボタンにまで手をかけ始めたので思わず彼女の手を
掴んで止めた。

……のだが

「ー」

…… や、わらかい……

つひー 勢い余つて胸タツチになつてる場合じゅうねーよーーー

「な、なんか、変だぞ！ これ夢！？ 夢だろー！ そつだー！ 夢だ

「！」

だとしたらこの変な状況に説明がつく。

「？ お前何寝ぼけたこと……」

「寝ぼけてない…… 瑞葉はこんなことしない……」
俺は掴んだ手を強引に引き上げた。

「つ」

そして、彼女の形をしたそれを睨む。
「お前、誰だよ」

眼を丸くしたそいつは、しばし動きを止めた。
そして。

「…………君も単純には堕ちないねえ」

目の前のそいつは、一瞬で顔を変えた。
白い服の妖艶な女 あの夢魔だ。

「仕方がない、君もしばらく調教してあげよう」

「！」

今度は女が俺の腕を強く引いた。

想像以上の怪力になす術もなく転ばされる。

「ツ！」

つて馬乗りすんなこのふたなり悪魔が――――――！

「さてどこから攻めようかな？ 男性を相手にするのは実に久しづ
りでなんだか心が躍るねえ」

勝手に踊つてんじやねー――！

抵抗しようつと拳を突き出すが、奴には避けられてもいいのに拳

が届かなかつた。

「！？」

「無駄無駄。だつてここは私が支配する夢の世界なんだよ？　君の自由は最初から叶わないんだと――――――！」

ちょっと待て！

じゃあなんだ!?　俺はこんなヒドいこんな奴のいこうとにされるのか!?

例え夢でもそんなの絶対嫌だ――

……つて、ちょっと待て。

じゃあ、瑞葉も同じ状況なのか？

「…………」

…………あ、やっぱー。

田の前が真っ暗だ。

前にも、こんなことがあつた。神経が、視界にいかないんだ。代わりに別のところに、エネルギーが回りはじめる。

『私の…………だから』

触れさせるわけにはいかない。侵入させてはならない。

だつて、俺は

『私が死ぬまで、私のものになってくれ。久城』

彼女と、そう、約束した。

「 ッ…」

手を伸ばす。

決して届かないはずの奴の喉もとで、今度はしつかつとそれは届いた。

「な

女は苦悶の表情を見せる。

「こじがお前の支配する夢の世界ってのは嘘だよな」
逆に馬乗りになつて、俺は吐き捨てた。

「こじは俺の夢の中で、お前はただの幻覚だ」

要するに、奴に攻撃が効かないなんてこいつのは、暗示だったんだ。

そう言つた途端、辺りの景色は一転した。

* * *

「 まさか、一般人に破られるとは思わなかつたね」

こじは元の屋敷の一室。

田の前にはやや引きつった笑みを浮かべる妖艶な女が立っていた。

変な術は破つた。

けじ奴を仕留めるにまじりつたりっこ?

「 どうやって私を消そうかと考えているね? しかし無理だよ君には。異形には異形を以つて挑まなくては

奴は俺の考え方を見透かすように言った。

「確かに君は、ただの人間とは一線を画す何かを持っているようだが、何も知らなさ過ぎる。そんな状態でここに乗り込むのは自殺行為だと思わなかつた?」

……何も言えない。

同じことを木村先生に言われたが、それを押し切つてここまで来たんだ。

「まあ、今更悔やんでも仕方のないことだらう。申し訳ないが君は口封じさせてもらひよ。私は少し余計なことを喋つてしまつた」
女はそう騒つと、ゆっくつと一步、歩み出た。

殺氣。殺氣だ。

痛いというよりも、ヒヤリと冷たい静かな殺氣。
奴は確実に俺を殺すつもりだ。

じり、と一步足を引いた瞬間、奴の手が俺に向かつて伸びて

「――」

刹那、奴は横殴りに吹つ飛んだ。

「あ

奴を容赦なく吹つ飛ばしたのは紛れもない異形の腕。
瑞葉だつた。

派手に壁にぶつかつた夢魔はきつ、と彼女をにらんだ。

「最近は暴力的な女が多いことだ

「黙れ淫乱。殴り殺すぞ」

……異形は異形を以つて……殴り殺すのはアリなんだ?

そう考えていた間に瑞葉は容赦なく腕を伸ばし奴の首を掴んだ。

「……シ」

そのまま凶行に移るのかと思いつかや

「 答える。貴様は誰の命令で動いていた」

瑞葉は夢魔に、そんなことを聞いた。

しかし奴は、騒うだけ。

「 ……重要なのは、そこじやない」

私にとっては、快樂に漫ぶることこそが、存在意義だったのだ。

それが夢魔の、最期の言葉だった。

143

「瑞葉、大丈夫だったか?」

俺の言葉に、彼女は『はあ?』とでも言いたげに怪訝な顔をした。
「お前こそ足手まといのくせに丸腰で乗り込んでくんなこのマヌケ
「丸腰で乗り込んでよく無事だったなって言いたいんだよな?」
「…………! ?」

瑞葉が目をぱちぱちしている。

何か俺、切り返し方を覚えてきたぞ。

……いや、思い出してきた、のか?

「 なあ、瑞葉」

「 んだよ」

「夢魔に変な」とされなかつたか?」「!?

「ふツ!?

なんで俺が殴られる!?

「いきなり変なこと訊くなこの変態ツ」

「し、心配して訊いただけだろ! なんで変態呼ばわりされなきやなんねーんだよ!」

「訊かれて私が一部始終をきめこまやかに答えるとドも思つてんのかあア!?

……た、確かにそれは、ない、な。

……ん? いや待てよ。その言い方だと。

「……あつたのか、一部始終……」

「!? あるわけないだろツ! あんなちやちな幻覚、すぐ偽物だつて分かつたつーの!」

瑞葉にしてはなんだか妙に動搖している気がするが、まあ俺程度で見破れた幻覚だ。瑞葉に破れないことはないだろツ。

「なあ、瑞葉」

「今度はなんだよしつこいな」

「いや、あのさ。俺、前にお前と……」

そう尋ねかけたその時。

「オオカミいいい――――――!」

そんな怒声と共に、金髪が部屋に入ってきた。

入ってきたかと思うとズカズカと俺にじり寄る。

「!? な、なんだよ!?

金髪は、それこそ怒った顔だったが、さらに口を開いて口として急に躊躇いがちに伏目になった。

「な、なんだよ? あの男なら瑞葉がやつづけてくれたからもう解

決だぞ？

「そ、その話じゃない！」

「？ だったら何の……」

「と！ とぼけたって無駄だよ！』

「？ ？」

「わ、私を口説いた責任！ とつてもうひつよーー！」

.....はいいいいいい！？
.....。

E4・5・白昼ナイトメア（後書き）

そろそろ私も必死です色々な意味で。

このあたりから話を転がして行けたらなと思つております。

いつも読んでくださっている方々、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8500t/>

イバラヒメ

2011年11月30日21時49分発行